ヲ 9
4310
3

79
4310
3

茶入ノ部

陶器（スヘモノ）節用ニモアリ

一ノ瀬　應法山

此丹大河丹ハ鍋島の御用山三河丹ハ平戸の御用山なり
他ハ貨賣ること禁ず伊万里商人の輻湊する
津ゆへ焼造るの場ハあれども元松浦郡有田の丹ゆ
へ其内中尾三ツの股稱古場ハ同国の丹領ちかい
又廣瀬などハ青磁物多く上品なれ故合
計四五ヶ所ありれども十八ヶ所ハ泉山の根にあり
則土の出る山なり

弘化五戊申三月調方ニ質問シテ其大意ヲ記シテ曰

肥前平戸

山本景興 俗甚左衛門

平戸領早岐郡三河内山陶器之草創ハ慶長三年ニ朝鮮ヨリ御歸陣之節松浦肥前守源鎮信式部卿法印平戸の城主ニ〳〵六万二千石を領す石列公門人也

石列流鎮信派　松浦鎮信　六万千七百石

肥前守重信肥前平戸の領主退隠〳〵て鎮信又退淨翁と號す元禄十六年十月十六日卒年八十二牛島天祥寺ニ葬る法名大虛院大心圓恵又曰天祥院慶巖德祐と云茶道初メ片桐石見守ニ學び後ニ藤林宗源〳〵皆傳を受く晩年家臣の茶道を〳〵て諸流を普く研究せ〳〵の一尾一庵と交り深きを以其傳をも知り彼是の長所を採りて一派を創むと云

鎮信熊川之陶器師巨関ト云者ヲ連し帰リテ平戸島中野村ニテ始テ陶器ヲ製セシム是ヲ中野焼ト云其風ハ高麗之風也今其地ヲ称シテ皿焼ト云

巨関之男三之丞ト云者今ノ今村家ノ祖中野村土ノ宜キヲ得サルヲ以領内所々ニ移リ日宇村早岐ヨリ一里藤原山ト云所ニテ焼タリ是ヲ藤原焼ト云今至テ稀也焼風ハ三島手ノ如シ

慶長三年ヨリ今ノ三河内ニ移ル三代ヲ彌次兵衛ト云今村

ヲ氏トス 法躰シテ名ヲ如猿ト云是ヨリ南京風ノ白手染付ヲ焼
筑前之国竹原五郎七ト云者ニ學ブ氏云五郎七焼ト云物ハ今アル
ヲ見ルニ青磁等ノ上ニ青画ナルモアリ又白手ナルモアリ如
猿焼ト云ヲ賞スル物ハ南京古染付ノ風アリ然レバ染付
ノ風ハ五郎七ガ傳ノミニモ非ズ来舶ノ唐人ニ習ヒアルイハユ風
ヲナシ互ニ其意巧ヲ交シテ成シルモノ欤
五郎七ト云者ハ佐賀領南川原ニ至リ其地ノ祖ト十リ
今ニ於テ連綿ス
爰ニ五郎七ノ門出タルニヨリ云国焼惣論ニ
今里ハ唐土ノ風ナリ元祖五郎七五郎八ハ山田五郎大夫

則之ノ末ナリ五郎大夫呉ノ祥瑞ヨリ帰リテ今里ニテ
果タリト云則之遠列ノ命ヲ請テ大明ニ入ル時支へ
送リシ自作ノ詩アリ古今里ト称スル物ニ亞媽港物多シ
石翁五郎大夫ノ門前ニ委シ
早岐ニ木原山江永山ト云アリ皆今村ノ窯子ノ家ナリ
佐々村ニモ窯子ノ筋アリ今ハ絶タリ又別ニ一種ノ陶器
アリ廣田村ニテ製ス
平戸領之内木原ノ番所アル辺ニ焼物ヲ堀出シタルヿ
アリ二三ヶ所ヨリ出ル其品多クハ破レ損ジタリ又形ノ
全モアリ其形ハ朝鮮ノ常器ニ類シテ簾薄也徳利

等恰モ彼国ニテ製シタルガ如シ真土茶古唐津ノ風異
ナラズ是ハ巨関ヒアラズ別ニ彼国ノ者帰化シテ製セシ
物カ此類品ハ唐津及佐賀ノ封内所々ニ於テ堀出シ
テ京師ニ出シ賣テ近年堀出シ手ト賞玩セシ事ナリ
真價モ高貴ナリシガ後真品類多クナリテ竟ニ賞玩ヲ
失フ今捨テ用ヒル者ナシ惜ムベシ
右之通

三河内焼物之事　問答
慶長三年松浦法印様朝鮮より御帰陣之節

熊川（朝鮮地名）より巨関と云者召連られる由事
平戸ふ参り中野村にて焼立と云事
中野村にて焼立ると申伝へ其巨細明らかなる
巨関の子三之丞日宇村藤原山にて焼る八代の事
号にあるとの事
白手ものは仕らざる者方なれハ寛永の頃より
ならでハ
ならでハ只今ハ三河内山にて焼る前藤原山にて
焼の事ハ相分るえた先年木原筋にて古き焼物を
堀出したる事ハ右之筋とハ別ふ焼物

あること事ニて武蔵国の風も古唐津の風と考へ
申候一説ニ別箱の焼物師なるべし

木原山ニて北手葭の本ニて焼立まゝとして
折尾瀬村の内ニも釜窯所数々有之ニ付得共此山
ニて彼山ニ移りしと申伝ふ分りかねる

三河国山田相模守ハ慶安三年の頃より相模ニ
て得共又二代三代目子巨関の孫ニ相成いたる事

三河内ニ相成ハ慶安年中ニて二代三代目
如猿と申人ハ三代目ニて三郎ノ子ニて今村弥次兵衛
と云人ニて武の事

序文作やられたる通ニてはなく
清茶所用ニ相成ハ高麗ニて八尤果ハ高麗傳
ふて鍋釜ニ成ハ文政年間の風も高麗井戸手抔と
の薬ニも見ニ尤多分の品ハ本文ニも申ル風ニ変
しかたと考へ朝鮮ニて猿ニハ南京風の深
鉢物ハ高麗ニ差ふて人々の深鉢乃手ハ全く別伝
ふて見ハ南京手ニ相考へ何故朝鮮の傳
を止メ深鉢ニ焼始めたる哉又槌太郎持傳ニて品
壺一説青磁の置物ハ高麗傳ニて品ふて何
を検別ニ成見ニ南京ニ成の事

南京傳ニ相成候ハ如何の譯と申候ハ
たくさん白手焼物等専ら仰付られ只今にハ
高麗傳の土組みて焼立ゆえもおもしろき色合
出来候様ハ仕候ハ
高麗焼風のもの
此度ハ試に仕候ても土合悪敷
成候ハ
丸形の壺ハ特渡る品と申傳る置物等ハ日本
にて拵たるもの仕候事ハ
麗にて焼立る品特渡て御座候
南京傳ニ相成候事ハ高麗傳ヲ失ヒ有田より習ヒ

傳へ候哉ニも聞及ヒ候如何ノ筋ニテ梁井傳ニ相成候
ヲ哉　右焼物ノ風替リ候何ノ年號ニ相成候哉ノヲ
竹原五郎七ヶ者白手焼物を三川内ニて習取
哉ニも相伝へ候ハ是ハ梁井手ニハ違ひ哉
巨関之息子ヶ者事ハ
分りヤすく巨関代ハ白手ハ出来ぬ
ヶ様ニ成候

今平戸ハ古く中野焼ヶ傳る品ハ古への白
高麗の風なるものにて如猿焼ヶハ古の
梁井ヶ風にて又繪高麗ノ風なる物も見

えとも是等も何ノ年ニ始りたる之事
只今之木原江永之焼物ハ三河丹後子筋ニ而屋敷
先年ニ木原と申たる人殿之本と申所ニ而屋敷今
之場所と八五六丁も隔り江永などハ享保年中
ようく八代ニ山立申さるべしと尤其以前築立
たる場所ハ不分明ニ候

早岐焼物之事問答

元祖巨関と申者朝鮮國より洛印様御連帰り
之由何之年号ニ相當り候哉

法印様朝鮮熊川之焼物師御連帰り之由申傳
候得バ慶長三年ニ而可有之候弘化五年迄二百五十年
ニ相成候

始ハ中野ニ焼立たる之事
最早中野ニ焼たる唯今ハ其所ニ而皿焼たる由
日宇村藤原山と申所ニ巨関之子三之丞と申者焼
たる先ハ何ノ年号頃ニ相当りたるの事
三之丞藤原山より所ニ而焼たる家ハ知れ申さず
去ども三川内ニ而焼立たる前所々土見立たる
ハ古窯ニ而焼たるものこれ有之

唯今之早岐三河内山ニ焼立ル事ハ何ノ年号ニ成ル
慶長三年ヨリ焼立ル
今村弥次兵衛ト申者三之丞ト申者の子ニ相成ル歟
今都弥次兵衛法躰シテ如猪ト申ス三之丞子ニ申由
朝鮮風高麗手ト申ス焼方ト只今の染付物風ニ相成
ル事ハ何成ル年号頃ヨリ今ト通ル歟
ト申ス
高麗手ハ朝鮮傳ニ可有之ル又筑前之竹原五郎七
ト申者佐賀領南川原ニ参リ白手の焼物を焼ル致
三之丞其焼ル習度存ジ其弟子ニ成リ焼ル

是ガ染付物ニ始元ト相見エ申ス夫ハ三河内ニ皿山
取立ル以前ニ事の如ク左ヘハ三川内ニ
ハ最初ヨリ染付物ハ焼ル義ト相見エ申ス
木原江永山ニ焼ル物ハ三川内ヨリ分ル
ト申ス歟
三川内ヨリ分ル事ハ
ト申ス
熊川ハ産巨関焼物製作仕ル事ハ朝鮮ヨリ召
連られ申傳ル巨関悖三之丞義帝国ヨリ佐賀
唐津領徘徊仕候内寛永六年内山ニ皿山ニ初テ白手

焼物出来仕候ようにこれ有候人其以前近国焼物ノ内にてハ
色合白手と申品一向無御座候ようにみえ候右者佐
賀大村又ハ御領分にて焼立ひ古き品持来り年數目利
いたしかたく申候者し市左衛門と其節ハ元右ゝ
年數ゝ有て白手にてもこれ已前の品ハ色合等ゝ
けい今ゝ品とハ違ひを覚る御見出来ゝ年号ゝ引合
セ相考申候右やうの筋ハ市左衛門と細工人共
ゝ白手焼物始ゝ年号ゝ筋ハ是マテ秘傳ゝ仕申
きけぞひ得共御尋ゝ付申上候且三川内にて焼立ひ
三之丞焼ゝ類古き品ゝ筋ハ土組違ひ付ゝ

ひ色合ゝ相違ゝ
佐賀領大村領唐津領皿山ゝ筋古き山ゝ十二ヶ所山頭
何ゝ何某と如猿直筆ゝ持傳罷在候右ゝ内只今潰
き又ハ外場所へ移ゝ山ゝ御座候人得共大体山立
ひゝ付其所々ゝ者ゝ山取立ゝ人ハ何ゝ者ゝ
相分ひゝ一向ゝ
領ゝ山取立ひ者さゝ相記ひ筋ゝ付御領分山
之筋ハ内更無御書記ひ相記ひ者ゝ
びひハ内ゝ巨関三之丞ゝ内築立ひ
ゝハ世ゝ代ゝ

大村領三股石三〻惣其子弥次兵衛共ニ五ヶ年餘
罪逃〻居候ものの様ニ不存候又
御国元〻天帰候様ニ志方半之丞ニ仰付ら
直様三河国ニ参り焼物製仕候〻ハ
〻ハ尤隣国能細〻ハ変名仕居候ハ
江戸表へ参呂連られ
如猿蓑ハ
〻〻ハ右之者元祖ノ様ニ申候得共所帰
陣〻節召連られ者〻巨関三代目ヨ
相當〻申候
右之通あらまし〻愚筆を以ものかき
させられ候ものニ〻ハ
又〻ハ
右調方質問其節〻の答書也　山本甚左衛門
此甚左衛門名ハ景興平戸侯老職也　不白流皆傳
製奇者の〻
此〻記ス
松浦肥前守詮（アキラ）　六万千七百石
居城肥前国松浦郡平戸
小笠原佐渡守長國　六万石
居城同国同郡唐津

鍋嶋家　松平肥前守茂實　九五万七千石余

居城肥前国佐賀郡佐賀

鍋嶋加賀守直亮　七万三千二百五十石

在所同國小城郡小城

鍋嶋甲斐守直紀　五万三千六百石

在所同国佐賀郡蓮池

鍋嶋備前守直彬　二万石

在所同国藤津郡鹿島

松浦豊後守脩　一万石

在所同国松浦郡松浦新田又平戸新田ノ

松平主殿頭　七万石

居城同国高来郡島原

大村丹後守純熙　二万七千九百石余

居城同国彼杵郡大村

五島近江守盛徳　一万二千六百石

居城同国松浦郡五島福江

長崎亀山焼　蕃来船ノ渡ナリ　崎陽又瓊浦モ云

亀山陶器の発端ハ八幡町大神甚五平と申者伊良林郷の山手垣根山と云所にて文化元年の頃より紅毛人年毎買帰る水麁を焼るを同志の町人山田平兵衛沢屋嘉兵衛古賀嘉兵衛ノ三人有〳〵ふ水麁利涅〳〵ひとて此人々ハ外商賣ふ様〳〵甚五平一人水麁等の類を焼〳〵いつ〳〵なく亀山一種の窯所と相成其後文化一年白焼を始め南京渡り深身物等の写を甚五平丹精〳〵新製を元来垣根山を麁山又瓶山なと〳〵を文政元年頃より深身物を亀山と

銘書いつれも銘書なく〳〵長崎のみ〳〵ハ新渡と亀山製とハ見分出来ぬ得ども大坂其外国々ハ此美別相分りがたく〳〵て亀山銘書ありき品ハ南京にまさる〳〵たゞ今あるし無名の品もなり窯数当時十三なり初代大神甚五平ハ南京〳〵深身を重ふ焼立二代目甚五平ハ深身物勿論赤繪物錦手金襴手呉州手等を焼急火焼等の新も注文に應〳〵焼立ケ〳〵唐人持渡り繪薬を公官へ願上帝拂直段を以て一ケ年買請市免に相成深身物に用ひ諸国と遠ひ深身物

色合よく〳〵彩渡り〳〵上品に出来上品々々多
く見受る近来八代賀領有田山にて亀山と
銘書をいたし〳〵大阪辺へ仕出し〳〵去る
ゟ絵薬色合為〳〵尤下品に相見えたり〳〵
右長崎村上聽松へ申合せたる書面二代大神甚五平
へ義り紀〳〵五位ゟ来る安政二年卯二月

當時窯左之通ナレハ前書と引合すべ〳〵

稗子場焼　志田焼　外尾焼　南川原焼
小田志焼　一ノ瀬焼　吉田焼　江永焼

廣瀬焼　三ツの俣焼　中尾焼　鷹房焼
三川内焼　大川内焼　木原焼　弓野焼
内野焼　長尾焼　白石焼　塩田焼
濱山焼　久保田焼　成瀬焼　白壁焼
真手野焼　下宿焼　美濃山焼　桃ノ川焼
有田焼　椎ヶ峯焼　黒牟田焼

肥後國

八代焼　享和三年又上野藤四郎代ニ水戸中納言様より八代陶工傳来之義委細御尋知ることれ度との事ニて書付指出候様被仰付度節先祖由来之義書記差上ル可則水戸様へ進ぜらるる所書ろ川〳〵

八代陶工之由来

明主神宗之頃朝鮮釜山海之城主ヲ尊益ト云其子尊楷ト云神宗萬暦四十二年加藤主計頭清正従朝鮮凱陣之時日本ニ連し来り暫ク肥前国唐津ニ滞留ス其後尊楷朝鮮ニ渡リ高麗ノ陶法ヲ傳テ再ヒ帰朝ス慶長七年三斎忠興豊前ノ国入封ノ節俸禄ヲ與ヘ家人トナシ同国上野郷ニテ陶器ヲ製セシム則郷名ヲ家名ニ免シ尊楷ヲ改メ上野喜藏ト称ス其頃茶道之數奇者小堀遠江守政一等モ茶器ヲ造ラ寛永九年前羽林忠利肥後国遷封ノ時喜藏并二子三斎ニ従ヒ八代ニ来住ス二子両家ニ分レ各家業ヲ勤ム又正徳ノ頃ニ至リ三家ト成ル皆俸禄ヲ給テ陶器ヲ製ス喜藏三子ノ内一子八豊前ニ留リ上野ノ郷ニ在テ家業ヲ勤ム今十時孫左衛門ト云

右之通ニ侍屋ハ先祖喜藏義文禄元年之頃唐

津ニ渡海今年マテ二百五十七年 私迄七代血脉相続仕
居奏以上

弘化五年正月

上野野熊 正英

又曰肥後ハヾ代焼

細川三斎侯ノ項ヨリ初ル外国人来リテ焼ハジム 三斎侯豊前
上野ノ陶工者ヲ呂ミテ習ハシム是八代焼ノハジメ也 今ニ上野ヲ氏
トスル陶工アル ヨシ 其頃肥後ノ士ヨリ唐人共地ニテ焼タル切タメ
二ツ水指一ツヲ送ル 書状ノ掛物ヲ見タルコトアリ
渡左エ門ト彫タル八代焼茶ハコアリ
石翁云是ハ八代焼ニハアラズ豊前上野ナラン

諸焼物ヨク呂宋モノニ似タリ 八代焼ト云来ル中ニ呂宋
フユカン窯ノモノ入交ル
土紫土砂交リ 黄赤土砂交リ 鼠土 薬黒白萌黄
青茶鼠
肥後国中 陶スル所多シスベテ肥後焼ト云
八代焼 惣体ハ川作りにて寿ふくろ多し
薬漬黄又鼠色白薬 三嶌絵ものなどなるもの
是ハ茶碗なり
八代焼吉兵衛ト云ふ名人ニて太閤様代より後
なり

肥後小代焼

玉名郡南賀手永宮尾村住居北小路又左エ門葛城安左エ門此両人豊前之出生細川公豊前国小倉より肥後へ御国之後御跡を慕ひ奉り肥後へ罷越夫ゟ有三斎公より南賀手永之内地所一町五反歩充両人へ永不置名字帯刀被差免候両家代々御用兼ねて窯元にて両人ゟ居所小代山の麓にて小代焼と云小代某之城跡なり北山と名へ摺墨山と云宮尾村と申小名へ龍の原焼と云ふ両家住所龍の原也

細川越中守慶順 五十四万石

居城肥後飽田郡熊本

天正五佐々陸奥守成正居後加藤肥後守清正同肥後守忠廣寛永九細川氏忠利以後代々

肥後八代細川侯家臣長岡某在城十リ

當時焼立窯左ゝ

八代焼　小代焼　鳩山焼　天草焼

細田焼　大村焼　木戸馬場焼

日向國

都農町焼　宮丸焼

大隅國

龍門司焼

薩摩國

年古ニ同國ニ唐人町トテ朝鮮人ノ来リト呼ニ居テ惣髪ニテ焼モノヲ業トス

挽右エ門焼（白土白薬黒ナダレトクワンニウ）石列戻箱ニ入此茶入得タリ此手ノ茶入遠州箱ノ品上京道正菴呼藏ス

仲次窯同呼ニ藏スルヨシ未此手ヲ得ズ

金繪物色画物ノ内ニ亞媽港渡リ物入交ル

茶入の下作ある内ニ尹部出来の青黒き薬の物入交る

薩摩　斗々屋と云来る物ハ新焼のトヽヤ云て琉球人唐ト交易して薩摩へ回り来る品なりと云

古薩摩といひ来る紫土青薬ニ黄の流きしある平茶碗なり是安南のスヽリ天目入交りしるし

右余諸焼物世ニ知る所なれハ是ヲ省く

古薩摩土ちやかく鉛色ふそ孫んぢりとなる茶碗黄色黒茶浅色白薬もなり蛇かい

素あり作も品よきものなり　小堀權十郎及甫十
と云瓢茶入有茶のあれど茶碗水指をくなし
肥後薩戸とふあり同じく茶ぐらなれども作
形ともあしくもひび
茶道釜蹄茶入国焼
古薩戸とふ利休時代遠州好み瓢箪形を
数十ヲ命ぜられ造る底に甫十と彫銘ス
故に甫十とふ肥後薩戸は実は肥後焼也
石菊曰　甫十とは宗甫政一の好なり故に甫十
とふ少堀権十郎とふ者也

當時窯ハ左ニ
田ノ浦焼　苗代川焼　堅野焼　天辰焼
大和濱焼

對馬焼
志賀焼　今窯ニテ茶入ニ用ル
此外ニ
渡嶋函館焼　後志小樽土場焼
琉球那覇焼　美野定林寺焼

茶入之形數

茄子 茄子ノ形

ツク子 似 松本 円坐 出雲 小茄子 富士

紹珍 北野 國司

肩衝 名物記ニ云フ八三十條ニ分ル 南都松屋肩衝ハ

文琳 文林ノ形

博多 桃 玉垣 鳥井 笘屋 紫室

本能寺 丸屋

文茄 名物記ニ云小出伊勢守ハ在所丹波国船井郡園部之城主二万六千七百石余也當国者明智日向守光秀ノ領天正十八丹波少將秀勝持元和五小出伊勢守吉親以後代々領之

右伊勢守所藏ナリ

丸壺 利休 金森 立花 寺沢

尻張 大尻張 利休尻張

大海 舟海 鶴首 柿 達磨 餅籮 蕃 簀

物相

木葉猿 利休百會ニ用ヒラレシ茶入也

高サ一寸八分 胴 二寸 口八分四厘 底 一寸

此木葉猿ハ箱ノ裏ニ木葉猿ノ

蒔絵ノ仙臺侯御所藏

廣口　飯銅　瓶子　樽　耳付　累座　瓢簞

上杖（紀州御物）　角木　馬蹄　常陸帯　鮟鱇

胴高　油滴　水滴　手瓶　弦付

十番茶入ト云

文琳　丸壺　屈豐　茄子　棗　肩衝　鶴首　角木　矢頭

肩衝　飯銅　銅

又茶入ノ形左ニ點茶法ニ

茄子（形五ツ）　肩衝（形六ツ）　文琳（円五ツ）　文茄（形三ツ）　丸壺（形四ツ）　屈張（形三ツ）　飯銅（形三ツ）　驢蹄口（形三ツ）

鶴首　形二ツ　大海　形四ツ　内海　形二ツ　水滴　形三ツ　勢至

湯桶　形三ツ　手瓶　形二ツ　餅簀　形二ツ　鎙（樽ノ誤リ）

瓶子　鮟鱇　十王頭　神頭　達磨　餓鬼腹　形二ツ

柿　瓜　橘　拍子　大鼓　車軸　瓢簞　形二ツ

擂茶　形二ツ　胴高　脊高　メ切　魁芋　芋ノ子　形二ツ

面取手　面取ノ面不取　蠟燭手　棒ノ先　釣鐘

上底手　西施　角木

茶入之形訂正

茄子　肩衝　文琳　尻膨　丸壺　文茄　大海

内海　鶴首　柿　達磨　餅蘿　物相　廣口

飯銅　瓶子　樽　耳付　擂壁　瓢覃　角木

驢蹄口　常陸帶　鼓鏈　胴高　湯滴　水滴

手瓶　弦付　十王口　花瓶口　瓜　芋子

追加

勢至　神頭又矢頭　餓鬼腹　橘　栂子（カウシ）　大鼓

車軸　脊高　メ切　魁　芋　面取　不面取

蠟燭手　棒ノ先　釣鐘　上底　手西施

又丸壺ニ利休　金森　立花　寺沢

尻張、大尻張　利休尻張

茶入之銘

口元　厚手　堀出し手　渡海前ノ作

瓶子窯　元祖加藤四郎右ヱ門本名上下ヲ省キテ藤四郎ト呼
春慶ハ法名ト云　初代二代同名ナル故ニ元祖ヲ古瀬戸ト称シ
二代目ヲ藤四郎ト呼ブ

古瀬戸名物之分類聚

古瀬戸土浅黄ヨリ色ホ見ルハ白ケリ　下藁柿
上藁黒　大瀬戸ハ黄藁ニアリ　糸切細ケリ　一体
薄作ケリ　唐物ヨリ出ルヲ形更上ト云　厚作
ケリ　下ヲ大ヤケルヲ云　造リ為

もめて上品なり

一古瀬戸　土白浅黄　藁柿黒糸切細カナリ

古瀬戸名物　茶道筌蹄に左之通出テタリ

筒井　なさ池　中川　山ゝ　松前　ろんゝ坊

松井　釣舟　東中庵　相坂　畠山　胴高　破被

鮟鱇　鈴木　吉光　浅野　平野　福嶌　淡雪

六條肩衝　山の井　可中　平手　鑓の鞘　九五

古瀬戸名物類聚　本朝陶器攷證に左之通

平野　耳付　相坂　畠山　可中　在中庵　浅野

釣舟　小肩衝　八重櫻　村雲　雨宿　大鳥

いよ簾　置紋　破被　肩衝　林肩衝　女郎花

節季　もゝ

舟海　出雲肩衝　敷嶌大海　浪花　霜夜　村雨

大海　京童　六九

一小瀬戸大瀬戸

土藁ゝゝ古瀬戸に同じ　但大瀬戸に黄藁なり

小瀬戸とハ大窯のゝゝ小窯のゝゝをいふなり

爰に因て曰く　元祖藤四郎ハ後堀川帝貞應二年

越前永平寺開山道元禅師に従て渡唐し陶法を傳

五年を経て安貞元年八月飯朝ス嘉永元申マテ

六百三十年唐ノ土ト藁トヲ持帰リ尾州瀬戸瓶子窯ニテ焼タルヲ唐物ト称ス誠ニ唐ヨリ渡リタルヲ漢ト云混ズベカラズ

和土和藁ニテ焼タルヲ古瀬戸ト云惣名ナリ大形ニ出来タルヲ大瀬戸ト云此手小瀬戸ニ異ナリ小形ニ出来タルヲ小瀬戸ト云此手大瀬戸ニ異ナリ渡唐以前ニ焼タルヲ元手厚手堀出シ手ト云 茶道筌蹄ニ曰藤四郎入唐後ヲ唐物ト云 説アレトモ甚疑ハシ

春慶 和漢ノ土ヲ交テ焼ク土浅黄藁柿或ハ黄輪糸切一体上作ナリ 春慶ハ藤四郎入道ニテノ名也

口瓢尊 夏山 隠擂茶 朝日 煎餅手

落書加ハル名物類聚ニ土浅黄紫下藁柿上藁ト云 或黄黒九糸切一体薄作ニシテ上作ナリ 唐物ヨリハ一段上作ニシテ肩ヒロク丸ノ如ク姿形無類ナル物也

煎餅手何モ窯ヨリ出ル丈ニ上ヲカセテ土フクルヽヲ云 又隠ノ字ヲ擂茶ト云ヘシ

春慶名物類聚 本朝陶器攷證ニ○ツキ

瓢箪 十王口 口瓢箪 飯桶 飛藁 蛍

閨 結台 文琳 縣春慶 蓬来 擂茶 雀頭

丸壺 雪柳 色春慶

真中古 二代藤四郎一体上作也 古瀬戸ニ似タル有 中古ニ似タル

有 土鼠浅黄白薄赤藁柿黒或ハ黄モ又青モ有輪糸切 九糸切ト云 本糸切二色アリ

茶道筌蹄〻左ノ通

橋姫　野田　大瓶　小川　思ひ川　面取　不面取

大覺寺　柳藤四郎　糸目藤四郎　底面　蠟燭手

花藤四郎　貯月　藤四郎春慶　塞（ヒシキ）　メ切

本朝陶器攷證〻

橋姫　小筵　朝霜　野田　面影（三国ゴク）　猿若　月迫　宮城野

蛙聲

大瓶　常夏　鈴鹿山

玉川　小島　蠟燭手

正木　大正木　大覺寺　泡沫（ウタガタ）　比丘貞（ビクサダ）

小川　初瓦　子ノタレ髪

思川　不面取

面取　染付　佐久間　吸江　轉合菴（テンガウ）　形違モアリ

藤四郎春慶　土氣浅黄（サウ〻ト）　糸切春慶ニ同シ　惣体春慶ニ似テ地ニ見ヘ上品ナリ

花藤四郎　底取　柳藤四郎　糸目藤四郎

貯月　瓢曹　閏

塞（ヒシキ）　常如院　井関　不二　紀伊海　初厂

メ切　瀧口　茶山

藤四郎名物類聚〻　藤四郎　土氣浅黄白薄赤下薬

柿上薬黒黄色有青薬もあり　一体上作なり

古瀬戸に似たるもの中古物の出きたるあり 也体古風
と見へて見事なるもの也 丸多切 本多切

面取 深色 摶合菴 吸江 佐久間 面不取
泡沫 比丘貞 思川 常夏 小川 祢くらん髪
青柳 吉光 淡雪 橋姫 狩庭 朝霜
野田 月迫 三國 猿若 面影 宮城野
清水 古里 初風 鈴鹿山 飯桶 勢至
小大海 茄子 引野 面取引野 麻衣芋
大口 谷大海 走井 木幡 高根肩衡
鳴戸 撫子 さゝ耳 一葉 木の本

金花山 三代目藤四郎 中古物ト云 丸糸切 本糸切
茶道釜蹄ニ

大津 飛鳥川 玉柏 二見 滝浪 生海苔
藤浪 黄藁アリ 盤余野 真如堂 廣澤
本朝陶器攷證ニ
三代藤四郎 土浅黄 白藁 柿黒ナリ 黄藁ハ藤浪
ニ限ル 輪糸切本糸切二色有一体藤四郎ヨリ上品
ニシテ 金氣沢山ニテ代々之内此窯見事ナリ
左之通出タリ

飛多川　春日山　木枯　雁鳥羽屋　雲井　三笠山
花櫻　底肩衝
玉柏　村雨　常盤　一本　芦垣　増鏡　玉藻
二見　即色
瀧浪　志賀　白浪　面影
藤浪　生海鼠　三輪　木本　松嶋
大津　打出　白露
禾　藤重　盤余野
真如堂　鏡川　龍田　鄭ノ灘　神楽岡
京飛鳥此内ヨリ出ル

廣澤　春雨　松陰　呉竹
同陶器及證名物類聚ニ左之通
金花山　土淺黄白紫下藁挿上藁黒或黄黄藁六角浪ニ
かぎろ丸糸切本糸切二色一体藤四郎より上品なり
金色沢山ニ〳〵代々の内金花窯見事なり
飛鳥川　瘤肩衝　雲井　木枯　三笠山
雁鳥羽屋　春日山　花櫻　玉柏　常盤
増鏡　村雨　二見　即色　大津
白露　打出　瀧浪　白浪　志賀
丸肩衝　木本　三輪山　藤浪　廣沢

水無川（ミナカワ）
女男川（ミナノカワ）常陸国アリ

春雨　真如堂　神楽岡　藤重　龍田
郷音灘　鏡川
瀬戸天目　谷陰　青江手　松嶋　妹脊山
盤余野　呉竹　白浪

破風窯　四代目藤四郎　九条切本条切
藁淄り破風ニ成る　茶道筌蹄ニ
みるめ川　音羽　菊　市場　浜紙のツマミ底
廣口　櫨粉木　黄藁物　橋立　凡　玉川
正木　米一　胴メ　正信春慶　櫨茶

堺春慶　後時代春慶　吉野春慶
本朝陶器攷証ニ左之通
破風窯四代藤三郎　土白薄赤藁柿黄或ハ黒輪糸切本
糸切二色アリ一体上作也藁留リ破風ニ出来ル故名トス
凡手　蓬生　玉津島　撰屑　小林　歌心サヽラシ
皆川　玉水　玉霰　女郎花　腰蓑　忘水
音羽　兒手柏　関寺　翁　増鏡　市場　忘水二重
宮島　月草　米一　布引　戸難瀬（トナセ）　口廣
天筒山　紹高　渋紙　潮露山　山櫻　垣根
破風　櫨粉木　黄藁物　橋立　捻貫　胴メ

同ク陶器及登名物類聚ニ左之通

口廣天筒山　口廣紹高　忘水　口廣雀飛彈
皆の川　玉水　宮島　音羽山　兒手柏
潮路菴　筧　山櫻　翁　增鏡　橋立　玉川
小島　正木　九　撰屑　玉津島　蓬生
米一　布川　戸難瀬　市場　冊の花
口廣　かさ形　芦垣　中古肩衝　大正木
破有　八土白薬赤下薬　薬板上薬黄或八黒本系切一体
上作ニ茶器ニ破有ニ名物ト云

後窯　九系切本系切　後窯トいふハ四代藤四郎ト云
後ヲ云　茶道釜蹄ニ
坊主手　山道　姉　利休　織部　捻貫
八ッ橋　伊勢手
本朝陶器攷證ニ後窯土淺黄白赤ニ有黄色上薬
いろ〳〵ニ下薬各柿石ハゼ梨子目作ニヨリカハル
本系切輪系切二色有織部正意ハサビタル形
万右エ門春慶ノ如ク宗伯国焼ニ類ス姉ハ飛
鳥川真如堂ヲ学ブ何レモ新シク見ユル
渋紙　利休　谷川　地藏　正意京　初祖　二祖

面壁 岡邊 宗伯京キカ猿 坊主手
茶臼屋京 山道 源十郎京 下露 環カヌマヤキ
有明 姉 八橋 鳴海尾刻 餓鬼腹

織部尾刻 澪ツクシ漂ミ

同名物類聚ニ 後窯土浅黄白赤ミあり 鼠色 上藥色
ムカシ下藥各柿 石ちゞ 梨子目等真作々ニ変る
丸糸切 本糸切一体 破風ふゝ 篦目ある品多く
下作ふゝ 織部 利休 正意等さびたる形多
一万右ヨ 春慶 宗伯国焼ふ類 姉八
花月 真如堂也 学ぶ土来 [illegible]

らくゝ見ものなり
落穂 振鼓 田面 鳥羽田 初祖 二祖 岡邊
面壁 芦原 尾花 環カヌマヤキ 下露 有明 辯舌
山雀 空也 佗助 谷川 澪標ミツクシ 地藏
餓鬼腹

本朝陶器攷證ニ

正信春慶 後時代春慶
思春慶 椿春慶 吉野春慶 伊勢春慶
擂茶

祖母懐　世ニ美濃焼ト称シ来レル春慶ノ類品ニシテ国焼ニアラズ

利休時代　落徳　振鼓　田面　鳥羽田　万右衛門

吉兵衛　ちくわ　深山木

江存寸　道味ム　宗伴○　長存ハキ

徳菴十　道祐メ　太平○

遠州時代　新兵衛　山雀　老苏子　弁舌　空也　瓢覃

糸柳　佗助丁

茂右衛門十

右以上窯分瀬戸ノ部終リ

藤四郎春慶　名物類聚ニ云

土氣白　葉浅黄　葉春慶　同前　糸切春慶　同前　惣体

春慶ノ類〳〵地茶さ〳〵〳〵と見るもの

ゆ〳〵上品なり

塞　紀伊海　井関　不二無音　初厂

常如院　野月　紫山　メ切

爰ニ此藤四郎春慶ハ別ノ人ニ成ルモノ　二代藤四郎

茶入の名ニ成るもの

大名物古瀬戸

圓聖坊　生駒肩衝　神谷肩衝　山の井

六條肩衡　淺芽　平手肩衡

東山殿信長秀吉二公ノ世ニ價ヲ定メラレタルヲ後世大名物ト云唐物古瀬戸也真數多キ故ニ是ヲ除ク

（乃此茶品類前書ニ茶道筌蹄ニ云古瀬戸名物ナラン カ）

其後小堀遠州公藤四郎以下国焼ニ勝ルヲ撰ミ名ヲ命ゼラレ世ニ多クハ知ル事ニ中興名物ト称ス今ニ手筋々々ノ名物見ル ヤ乃ビタル家ハ皆是ヲ載スルト雖モ當道漏ルベシ又世ニ名物ナラヌ物ヲ名物ト唱ル

ラン ヲ除ク

右ニ云名物類聚抄ニ焼ノ事ハ記レ真国ハ記レ

ザル ハ名目ハ有ノ名目ハ無ク悉ク抄録キ

ど此名目拾遺の品ヲモ悉ク抄録キ

の茶ノ名ヲ何々ありトハ事ヲ必ズ

其国ハ人ノ作ルヲ茶ノ作ルハ異形ノ物ニ

さるべけれども茶ノ乱流ノ端ヲ

窯名ニ載セラレル名目ニ名国ヲ加ヘ国焼

のるもあれども

をくるさるこハ省く

瀬戸焼物の始原窯所代々の名匠等左に抄録
さて窯名名物類聚等にも瀬戸焼
物其子細を見るべしとも左につかふ
加賀四郎右衛門と云ハ尾州瀬戸の里にて始て
茶入を焼りを世に口元の下にて焼
焼方の銘録なく手厚にして不格好なり
真後渡唐して焼物の法を相伝して帰り一切の
焼物に鞘を作り底を下にして焼出夫より
初て解け立る和歌にて見事なり藤四郎
順徳院建暦中の人なり唐の傳記越前国

永平寺にあり
根接古瀬戸大瀬戸
口の付根蕚留りの境に黄茶の色にて青みなる茶入
ふるきものなり中ハ沈立にて口元ハ四角を梨
子同様なる茶碗なる云根接の物来なり口拡り
返して九くして玉縁を取なりて尋常
なり胴ハ大きく物にて聴色の茶入もあり
根接と古瀬戸かたるものハ同作なり根接
ハ手厚ハ返りしるを云茶碗ハ作りて細工ハよ
く土等もよきを大瀬戸と云世間称する茶入

なり　茶入肩衝頃八四寸余丸壺尻膨茄子
瓢箪　内海瓶子　其外の類を造りて大なる
茶入ハ稀なり　小振の茶入自然と多なり
根抜とハ古き事　根の如くなるもの
古瀬戸黄瀬手とふなり　是ハ何れの窯にも出る物
なり　窯の内にて火を用ひるなり　上薬かけて地土
ふくれなる物なり　後唐の土もくなくなりなるも
なり　和の土を合せて焼なるを春慶と云　春慶
藤四郎と法名なり　二代目藤四郎の作を真中古物
とふ　藤四郎作と唱ふるハ二代目をさして云なり

元祖を古瀬戸と称し　二代目を藤四郎と称するハ
同名二代続きなるゆへ混ぜざるゆへ唱へなるなり
藤四郎春慶も二代なり　三代目後四郎是を中古物と
云　金花山窯の作者なり　四代目藤三郎是を中古
物と云　破風窯の作者なり　黄薬と云ハ何窯
なるか　正信春慶とふものあり　正信ハ何
人なる事を詳にせず　又後代ハ春慶と称する　堺春
慶　吉野春慶なり　後窯と称するハ
坊主手　宗伯　正意　山道　茶臼屋　源十郎　姉
名出見　織部　捻貫　八ツ橋　伊勢手　一万右衛門名也

又遠州時代ハ新兵衛 江存 茂右衛門 吉兵衛等ノ
真外國燒ト称スル物ハ薩摩 高取 肥後 丹波
膳所 備前 伊賀 信樂 唐津 市室 仁清 ナリ
祖母懐ハ美濃ノ國燒ナリ 大窯物ト云ハ瀬戸ニ
ナレ 至テ後ノ物ナリ 右後窯以下國燒ニ
遠州名多シ
堀出手 瀬戸 赤津窯ニテ燒ル茶入 或ハ鄕音 或ハ割
或ハ取リ付 或ハ毋貫等ノ有品ヲ 山谷ヘ捨置ナリ
自然ニ晒荒古ルナリ 土藥其事ニ有リ 近年
谷底ヨリ堀出ス 用ヒ ナレトモ無疵ナル

茶入ハ古ノ疵ハ多シ 尤此ノ疵ハ多シ もくるる かくれと云
祖母懐 是ハ尾州瀬戸ノ名ニテ ナガフタ ト云 更アリ
ヒヲ形ニテ燒ル 茶入ヲ云 毒肩衝 丸毒等アリ 底ニ
祖母懐ト書付ノ茶ノ名ナリ 又毒ニ 祖母懐ト彫付ル
モノ 皆古瀬戸ノ類ナリ
花藤四郎 口ノ上ニ菊ノ如キ紋アリ 或ハ梅ハ笹
ノ葉カ ノ物ヲ飲ミ 花蔓四郎ト云ナリ
又黄蘭四郎ト云 一面アリ 是ハ地藥黄釉
ノ艶ヨク黄茶釉色ニテ 雲ノ如クカヽリ 交リ

京月藤四郎 茶入ハ ぶり〳〵形多〳〵薄〳〵作
好よし〳〵 茶入の胴ハ京月あり 上ての作なり そく面
下茶 柿色多〳〵 濃き栗色茶もあり 上茶むら
〳〵と黒雲のごとくもちたる 又地茶色ハ
き上に黒の刷毛目あるも 是ハ外茶ぐさ
ぐなり

虫喰藤四郎 是ハ土茶に虫のくひたる跡あり 細き
流れ筋もこれ見 なごりの内も虫喰の
跡もそなり

春慶藤四郎 法名なり 一体角ばりて上作なり

唐物より八一段上作なり 肩なだ刃のごとく姿も類
なる物なり

藤四郎春慶 如体茶入類にて地茶さら〳〵と
見ゆる物にて上品なり

朝日春慶 一説を美濃国朝日と云所にて此一通りを
焼ひろめ〳〵と云 一説本朝日城にかたどり藥
の色合ふたの〳〵色ハ朝日のかぐやくやく火同あるも
加なりとも云 是ハ所の大事 切首乃秘色なり
と云 是事なる茶入類なりてくなるを為なり 土佐の
黄色仙 古きなり 茶くろ九多切乃茶

堺春慶義環ノ子尾張国堺ゆく窯を立焼せ〜こゝろ〜
いふ又泉州の堺にて焼こゝと云ハ誤なり〜或人云堺も焼
ハ泉州堺の津に数代居住の人なり尾州に迦き瀬戸
に於て茶器を製し又伊勢に於ても製をうけて
堺を号と呼ぶ故なり今ハ堺ハ休居士の以来堺ハ
居住〜なるゆへ堺舞慶ともいふなり
金氣春慶 薬立 錆色の如く見ゆる性好細工よ
り〜有り堺春慶ハ常なり
瀬戸春慶 瀬戸釜の焼物故なり 朝日手作者なれば
以後の焼物なり 然ども本家の手癖なるゆへ云

却 舎春慶 是ハ見る度ゆ心のとゞまるなり 土黄色口造り尋常ゆへ糸切花奢なり
伊勢春慶 是ハ尾張の境〜なゆへ伊勢ゆとつゞのゆ
ゆ慶の作ハ有ども性ゆ春慶と云上作ハ
飛薬 是茶ゆふハくゆ多ゆ以云春慶と
似ゆる物なり 土やゆゆかめて下の糸の銀沈ゆ入りて
是茶多〜 右細工ハ春慶多ゆ
金花山一休ハ藤四郎ゆ上品なり 金色沢山ゆて代々
の内金花窯見事なり 金花山の地色ゆたゝへて云なり
土薬色乃かゆゆ物なり 肩衝 底張等あり 油出る

とゝ云し藁俎金花山と同じく事なり生海荒くと云し
同名なり府黄藁手し此同じ名なり
金花山八奥州松島の東にあるべし一山さながらこがね
なを川く移るごとし海底の産物金海荒八金
砂を含を以て其腸黄金色なりさもあるべし
草木まぢりし物なれば只砂石皆奇状異色
なるべきなり　古歌
をぐらぎの浦代さらぬもとあれまなる
みちのく山ふもとあぐる花候
破風手　一体上作みな藁焙破風ふもれる故云

鳴海手　古織尾別号鳴海ふ窯を立茶入六十六焼を
同じくひろめんとなり所の名を以て云土薄浅
黄薄手ふ作り見事なり類をくなり
織部焼　土藁利休同前尾張耳付其外色々の
異風物なり　古織部数寄の焼物なり
源十郎焼　利休時代の焼人新兵衛ふ劣らざる作者
なり
利休焼　土薄赤色大ごく板ある〳〵なり藁俎
品々脊高き茶入多〳〵　利休物数寄のこと焼
〳〵とゝ

免四郎焼 藤四郎三四代の作者なり 字佐の上林ふ
免四郎と底に書分 壺有り と云
茂右衛門焼 利休時代の作者と云
宗伯焼 同上
新兵衛焼 京三条通瀬戸物町に唐物商賣を家
業とし尾張国瀬戸へ下り茶入を焼なり 名人
みなり 上物なり
正意焼 初八堺なり 京都に登り室町四条下ル所に
眼科を業とし 又瀬戸へ下り茶入を焼しなり
茶臼屋焼 京町押小路下ル本願寺前の者なり 又
堺にも住居 又京都五条にも住居 大瓶を多く
焼と云 利休利休時代なり
江存焼 利休時代作者の名人なり 底に松葉ノ形あり
吉兵衛焼 利休時代の作者なり 此焼物ハ古瀬戸ノ
贋物を多く一心にけるふりて自作ハあり
きなり
大窯場 遠州時代尾州焼
高野窯 利休時代是ハ家号なり
茶入の形ようなる名目あり 前書あり
なれども

禾目手　後の禾目手　金花禾手　渋紙手

捻貫手　黄蘗手（真中ハ黄蘗手　内黄蘗手）　後黄蘗手

天目手　野田手（奈良野田屋弥兵衛所持　一説ニ遠州野田の藤見みわうれしかりけるとそ　なるへしと）

口廣手　小川手　下髪手　肥取手（カヒドリ）

早乙女手　辰の市ハ瀬戸　姉手　御堂坊主手

山道手　遠山手　頸長手　赤熊手

追覆手　面影手　厭面手　市場手

寺の子手（姉ハ古歌ニ云　世の中ハ市のかり場の一さとぞ　むらくもとうくもるく）

半入袋　半切手　大覚寺手　米一手

比丘尼手　蟋蟀手（きりぐす）　鼠大瓶手（城州伏見大瓶谷）

後大瓶手　面取手（面取手の面不取手）

蠟燭手　碾茶手　芋子手　芋頭手　上底手

釣鐘芋子手　杜若手（かきつば）　又八ッ橋手　猪手

瓢尊手　油虫手　一筋頽手（此薄黒色ニシテ一筋流のあるものなり　大ハ二筋流あるもの　小ハ一筋流ニ云）

宇治橋手　摺糊木手（又擂スリ粉木ト云）

胴塚手　胴メ手　柿手　柿手　柿手

胴塚ニ對ス　胴ニメ云

餓鬼腹　藤波手　夏手　皆口手

常陸手（正月十日鹿島ノ神事ニ帯ヲかくる事有り　此茶入ニ帯あり　名号ハ多くハ

唐物にあり　委しく前に出タス

耳付手　耳丸くして名高き　達広手

棒の先手　思ひ川手　底取　底面手

撰屠手　折出手　清水手　音羽手

袴ぬぎの手　裸焼手　佐野底手　山の神手

俵屋窯　在中菴　青江手　遠州公家臣勝田某水くゝ公へ献ぜし　瀧浪と呼ぶ後青江と委しく前に記す

北斗手　此手前書に委し

雛手　此手前書に委しく

大海内海

東山殿の頃より利休翁初の真外高名の茶人茶入唐物名物を以貴玩あり遠州公時代より中古物を以て貴とせらる昔の茶入背高くして取扱し悪敷方なれ共後の世の人氣を考脊高き三寸餘を過ぎ巻し尋常の物を貴玩して面白き茶入は古歌の心を以て名を付られしより又自詠もあるべし

前に歌を書しなるべし

飛鳥川　金花山　滑飛鳥川　可中　古瀬戸

釣舟　古瀬戸　伊豫簾　古瀬戸　夏山　藤四郎

橋姫　藤四郎　常盤　金花山　落穂　万右ヱ門

廣澤 金花山　真弓　雪柿 古瀬戸　柳 万右エ門

凡 破瓦　音羽 破瓦　（後振鞍）

岡邊 正意又後窯　面壁 上ニ同シ　色即 金花山

環 源十郎又後窯　有明 上ニ同シ　山雀 新兵衛　相坂 古瀬戸

浅野 古瀬戸　破被 古瀬戸　（盃漆張成造ナリ）

さゝ浪 金花山　浅芽 古瀬戸　白菊 窯所未考

白露 金花山　山の井 窯所未考 石ヶ谷日古瀬戸　澪標 後窯

思川 藤四郎　宮城野 同上　雲井 金花山

木下 金花山　木枯 同上　玉拍 同上 茶入奈良屋弥兵衛云ハ新渡の捕こて一丸

（ゆ〜〜うゝ巻〜〜きゝ葡萄こゆ〜〜うゝ）

増鏡 破瓦窯　三輪山 金花山　藤浪 同上　鏡川 同上

皆の川 破瓦　忘水 同上　菊 同上　玉川 同上　蓬生 同上

玉津島 同上　布引 同上　妹脊山 金花山

盤余野 金花山　呉竹 同上　垣祢 破瓦渋帝手

霜夜文琳 古瀬戸

凡巻物の名号ハ其時其人の物ふれて思ひうれる

もものバ古歌古詩こよりふ決ふもあるべし

古き器物の名号ハ器物ハ似合〜〜めでゝ其名

めでゝきこもあるべきで古の引くこと名もの子細も

皆其人ゆゑ〜〜ゝ名ゆゑ〜〜ゝ

かくこそ〳〵と古人の考へ〳〵あきたるなれ
ど余の為るべ又考へるをも書加へ〳〵れどかぎ
りなき茶道の名を其るゆゑを悉く究尽をも
むかしをもるる為ぞふひ猿猴の月ふひと
き業ならん〳〵

ツクモ茶入　江浦（ツクモ）　塗師藤重

此茶入ノ事　藤重ハ姓なり　名ハ藤厳とふ
利休時代なり　元来塗物ハ本業にて尉大
徒なるなり　名人なり　関東にもされ
く江戸に住人其後孔世後ゝ破損せ
名ゝの強ひを以作事を尋ねて〳〵ツクモの
茶入を賜ふ名物なり　今に藤重の家蔵也
二代目の所袋師となる孫なり

點茶活法濃茶入之事

唐物の茄子ハ茶入の内ゝ最上の物ゝ子真行臺子盆點の片
濃茶ハ必ゝ茄子に入ゝて用る也主客共に畳の上に直に置てなし
但し常の盆無〳〵の片ハ茄子と雖も畳の上に置也真行臺子
ハ濃茶に茄子を用ひ薄茶ハ唐物の肩衝を用ひ〳〵

故、古を唐物の茄子と肩衝を呼持せされハ真行臺子の茶
は爲すを得ざり〳〵 故之をする者寡かり〳〵と云
茄子ハ圓座あるも有り 宗悟茄子 北野茄子 醍醐茄子
豊後茄子 水瓢茄子 京極茄子 紹鴎茄子 黄茄子より
皆古來の名物なり
老茄子と云ハ乳の黄色なるを云ふ 植置たる茄子秋の
末霜に遇ひて後黄色に成るあり然る故、乳の
黄色なるを云ふ 押せ〳〵て小壺と云も茄子の壺なり
但〳〵丸壺尻膨の類をも小壺と云ふもあれハ丸壺も
小き茶入ハ小壺と云なり〇茄子茶入の蓋ハ榎ノ實ツ

ノなり 多分口付蓋ハ小口挽なりと云
尾張ハ茄子の形悪きを云なり
文琳ハ色と形を以て名附く 林檎を文琳郎菓と云
是、金林檎 紅林檎 密林檎 黒林檎 水林檎等あり
其形に似せて造りたるを文林と云なり然る、文
琳の中、藥滑かみ〳〵捻返〳〵あり形美〳〵き
あり又古〳〵より文琳と云傳へ〳〵ふ茄子とも柿と
も丸壺とも形の美の難きの季只形美〳〵く林檎に似
たるを文琳と云なり説是に近〳〵
文林に口作片そぎ両そぎなり〳〵口の捻返〳〵の所を

片方よりすぼまりたるを片すぼまりと云ひ是を下品とし
両方よりすぼまりたるを両すぼまりと云ひ是を上品とす
文茄と云ハ京都針屋宗春が所持せしを秀吉公召上ら
れ付られ名定の難き故文茄と名附られしこと此説ハ
あしきと云或ハ作久弓天閑（茶壺ノコトナリ）（石菊ノコトナリ）の附られし
名ありしと云ふ（此ハ石菊云作久間宗透茶壺の号種林蔵す）
又茶道筌蹄に文茄ハ名物記に小出伊勢守所持ブンナとあり
茄子ハ茶入中の王にして式正真行の臺子に用ふ而して茶を
茶盌へはきへるゆハ必ず指を底へ掛るなり但し九壺文琳
等都て小壺と称する物も亦底に指を掛るなり

小壺の中小形なる茶入ハ手の掌に載セ向の肩へ大指を懸る
なり　肩衝ハ小壺の次位也真行臺子にて茄子に濃茶
を入るゆハ薄茶ハ必肩衝にはくなり　脊の低きを半肩
衝と云○肩衝の蓋ハ古来板目にして落し蓋平づくめ定
りしなれ共ハいろ〳〵なる形の蓋あるなり
肩衝ハ茶盌に茶をはく片底へ小指を掛け手指を
揃へて一文字に持也但一説に茄子ハ天子に比す故指二本
を掛け肩衝ハ將軍に比す故指一本を底に懸く是
を肩衝會釋と云と此説に因れば底へ指を掛るハ
異竟之を尊ふゆ起るなり如くなれとも元来小壺

を肩張らず底へ指を懸けざれハすべり落るの形
あるなを底へ指を懸るなり　肩衝ハ此形なり
懸るに妨なし　且ツ丁寧を示すもの
ハ好む器に陶ふべし
驢蹄の茶入ハ口作驢馬の蹄に似たるを以て也口作を名とす
何とも形の知れずして駄蹄口なる物を云丸壺等もしの
り形の知れざる物を驢蹄口の丸壺なるべ本名を称す
るなり
飯銅の茶入ハ皆口とて裾張り　飯銅の水指に似るを以
て歸くるなり

柿の茶入ハ柿に似るなり　○梨の茶入同様　○瓜の茶入同様
柑子の茶入の同様
餌籠の茶入ハ鷹司の名ふに似るなり漁人の餌籠に
似るなり　二品なり
瓶子の茶入ハ神前に供へる酒次に似るなを以云ふ
餌籠なりハ裾細く長し　○罇の茶入之も酒入
也瓶子に似るなる物也瓶子と罇との違ひハ盃附外へ
開くなを瓶子と云盃附直くなるなを罇と云也
鶴頸の茶入ハ鶴首の如く自然頸立伸び　鮟鱇ハ
なんとの口に似　神頭ハ矢の根なある矢頭も似るなり

達磨ハ珠數の粒に似○餓鬼腹ハ餓鬼の腹に似○十王頭は
閻魔王の冠に似石菊曰十王ロエンマの口ヵ似たる口作ふらん
車軸ハ車の軸ヵ似○櫛茶ハ櫛木の頭に似たるを以て歯く
石菊曰櫛茶と累座と不多分
○大鼓背高等銘の如くなるを云ふ○水滴の茶入ハ急須の
如くなるに口とかたる者又口斗もなり或説に口と手と
ともに油滴と云ひ手なきを水滴と云ふとなれども能
阿弥の君臺觀ハ水滴と共に水滴としてに出したれハ
古来両種ともに水滴と云習はしたるなるべし
○手瓶の茶入ハ水滴の如くにして手なりて口なき物

をいふ○湯桶の茶入ハ口の上に弦の取手附たる物
ハ○大海ハ口廣く海の如くと
云ふり歸るなり 形歌小さきを舟海と云又口の大
小共に舟海と稱ふる方穏當なるべしされど辯玉
集に八大海と云事口の徑水林々としてに廣きを海と
云事なり大海に大文字書ヿ誤り也舟海と
書也又小きを世ハ小舟海と云へり此説非也
小さきハ小舟海と云此説本義也と然れども世に普
大海舟海と云傳へたる事なれハ苦しからぬ義
なり又舟海ハ大海の小きを海の心なり 昔日

大海ハ茄子の茶入或ハ肩衝の茶入に一ツ宛添置之なり
茶臼より大海に茶を移し〻て後茄子或ハ肩衝へ
茶を入替るなり 然れハ大海ハ挽淵なり 古より
小壺數へ出し〻る法なし 自然廣間書院の臺
子に八莊置なり 利休作意にて大海を挽淵に用ひ
て焼物と焼物あぶるき事にて挽淵に吹雪を
被用と見えたり
勢至胴高陸常陸帯等の茶入ハ何等の譯にて號
けし〻諸說なきに非るも判然せず 諸茶入の
形大凡別に圖を出す

石菊曰
茲に常陸帯ハ正月十日鹿島の神事に帯をかくる事
なり此茶入に帯あり因て名付るなり
唐物なり
右の外尚あるべし 且茄子に似る文琳あり 文琳に
似る丸壺もなり 各種皆準之故茶入の面取の
を以て輕忽に之を定めかたし
茶入の面を定るハ下ふ篤と置き居掛る方を
其物の面と定む居掛る方もなく藥箇りの
景氣見事なる方を面と定るなり 然るに
雖も其茶入ハ一概に定め難し 大なるハ

真心得を以て宮むべし　但藁の景を撰むハ自ら
真人の好悪ありて一定せず既に名物松本肩衝
の如きも利休好まれし面と織部好まれし
面と異れり故に客と成り手を取一見するハ能く
亭主の好たる面を能見定めて後一見すべし
水滴の茶入ハ習あり袋ハ及袋へ納て莊
るハ何時も手を前とし口を向とす或ハ口有
て手なきも又手なりて口なきも同様手ある處
を前とす袋より出して後ハ口を我右とな
手を我左とな　て置又客に出す時ハ裸を
して面を面として出す也　○手瓶も同前也
湯桶の茶入（或ハ弦付とも云）も弦を横ゑ爲す耳付
の茶入も同然耳を横ゑす

茶入を棚或水指の前等ふ荘る時ハ何時も面を我〻前
み為す也 取崩〻ハ同然客所印あり〻為す時も
面を客の前に成る様廻〻出す也 但〻水滴
手瓶ハ前に云如く特別の習あり〻取崩〻ハ手滴
口とを横〻〻置き茶杓ハ手に持たせ掛て置く
なり 右茶盌へ茶を汲入る時ハ口を向ふ方を前に
成る様廻〻〻汲入る也 蓋〻口と手〻〻茶の こ
ぼれ掛るを恐るゝが故なり
茄子の茶入扱ひ茶盌へ茶をはき入る時底に小指
一本乃至小指無名指の二本を掛ける 丸壺文琳尻張

大指ハ前ト向ト相違

等同然〻〻す ○肩衡ハ底ふ手を掛けず指を揃
へ一文字に持つ也 ○大海ハ掌み載せ大指を向の肩
へ越させ〻〻掛くる ○小壺の最も小形なる物も此
扱ひに為す〻〻 ○皆口蝶番蓋の茶入ハ大海の
如く扱ひ大指を我〻左の方の蓋の上へ掛け 右の方
の蓋を取のるなり 左の蓋に掛る也
湯掬の茶入割蓋ハ前の蓋を取茶摺の方を上に為〻〻
置次に向の蓋を取前の蓋と腹合せみ重ねる也

其他の茶入も皆こゝ形也固り前五種の中と区別ふ
べ〳〵の茶入の蓋多くハ象牙なり木の女夢なり
形も一様なるず撮ハ複の實撮平撮瓶子撮等
新発明なり。蓋の裡張ハ金箔也之れなも受
け張とぼ張等あり。茶入の蓋口の大なる茶入
ハ蓋を小さめとなり口の小なるハ蓋をかぶ
せて遠る捻返〳〵の薄さハ蓋の縁と畳く〳〵
捻返〳〵の畳きふハ薄く挽かせて今すなり
茶入の蓋を取ハ必三ツ指なるべ〳〵二ツ指ハの
〳〵云撃氣に見へてなり。蓋置所ハ柄杓

の柄棚の地板畳縁爐縁風爐ゆゑハ小板も置也
巣のなる蓋を用ゐる時ハ左右何をへゝ竪て爲すも也
最初利休ハ巣を卑下〳〵て勝手の方へ爲せ〳〵を
織部ハ之を貴翫〳〵て客附こゝ〳〵利休も之を感
ぜ〳〵ゝ世人多くハ客附こ爲せ〳〵茶杓ハ巣の
無きこゝ(形)〳〵て拂るゝ
石蕃曰爐風炉ともこゝ所に巣をいたすゝこと
左の文体こゝて解〳〵て拂ふ
宗和槐記こ曰茶杓を茶入の象牙蓋こ掛様ハ先ツ立掛ケ
ゆするゞゝ蓋も大こ茶入も平目なるぼ上へ載

すゝ〳〵　載様ハ摘〳〵勝手の方〳〵巣ニハ丞構
と仰也予云摘と茶筅と隔つに非ずやゝと仰に隔つ
に非ず若摘大うに脊高くは外の方へ掛る事もゝ
べきう　○棗と吹雪とハ茶杓の掛ケ様各別也棗ニハ
向ゝ掛ケて前へ引すわる所ゝ故つ吹雪ハ前も
向へ掛ケる

又曰

千家要録茶杓ノ部ニ
惣て茶へ茶匙立掛置時ハ蓋の摘をまゝかせぬ也
惣て茶杓ハ茶入の蓋の巣の上へ置かず爐ゝてハ客ノ
の方風炉ゝてハ亭の方へ置ゝり依て風炉ゝて
爐の向様ゝ但蓋の摘を避と云譯ゝ有ル也
點茶の時茶入の蓋の取り内を見る時其ノ蓋の裏張を
客ゝも見ゆる様ニなすハ茶ニ毒などへるゝと云懸念
を辟る爲の古實也茶入の内ハ毒ある時ハ裏張の金色
變ずゝと云傳ふ故ニ蓋を取り客ゝも見せ色の不變を示
すゝり　○細き茶へを畳ニ置ニハ藺の目を掛て置

なり　茶入傾かぬ為なり
石翁云　峯谷とは峯の目乃事なり　茶入ハ峯ゆ至
茶筅ハ谷ゆ至るべし　茶ハ三器に限るべし
茶ハ茶器ゆ茶盌ゆ至るべし
三器とは茶入ハ結芳の芳有べし
茶入とは茶盌へ茶をはく時茶入の口より茶をはく
盌へとるハ茶ゑ切る迚古より嫌なり　但し
草庵小座敷ゆて大茶入のかすり点をなすは或ハ
侘人の茶を拂ふ時ハ格別也とす
茶入へ茶をはきへるハ濃茶薄茶の別なく中高へ

るべし　殊に大口皆口等にて入る時ハ別て心得るべし
蓋を取る時ハ客人より見る物故丁寧なり
点茶の時茶入を取扱ふに真行草の習有り　左方を云
はゞ　盆ゆ載て莊り其扱取置も右の手に持左の手を添
て扱ふ様　眞の會釋とし　盆に載せざるも共茶盌と
も茶筌とも置合ハさず　取置きは必右の手を以て
を行の會釋とし　茶盌と置合せ茶筌とも置合
其取置きも左の手を以て為すを草の會釋とす
尚其詳細ハ式正茶法に云也
茶入を物と置合す時の距離各其物の大小高低に

因りて定むるなり　遠ければ鈍く近ければ急なり
水指ふて云はゞ見通し　二寸内外を通常とす　茶
筌みて云ふゞ畳の目見通し　三四目を通常とす而し
て真物品の大小高低に因り置合せ見て目の矩に當る
処を定むべし　茶湯百首に「矩をはづすが直ぐ目
かなり」とあるは即ち是なり
茶入を茶盌と置合す竹先づ茶入を置次に茶盌
を置合す事　故に蒙め茶盌と水指との距離を覚
え置茶入を真目的ふて置備茶盌を置合すも
此時水指と茶器茶碗の位置果して恰好せ
ざる時は茶盌置て後再び茶入を程能所へ
取直すも妨なし　一説に茶入を再び置き
あるは當に妨ぎなきのみなるべし　畳目の如
く却て風情あるものなり　茶入茶盌の距
離は見通し　三目四目を目的とす　尚其大小
高低に因り加減すべし
小壺の捻りと云習あり　是は茶盌に茶をはく時な
る事なり　茶杓へ能く茶を掛らせん爲にする
なり　石菊云　茶をすくふに茶入をあ　ひ移り傾て
茶をすくひあるなり　茶筌もあれ　捫ヒ子り

茶入を拭ふ時ハ何の敢み論なく必す底へ指をハ
指ゝるとの事
石蕃曰茶入の袋をはづゝ拭ふ時ハ抹茶入の面を
初め〳〵亟三度也〳〵 ゝ事
後客所望の時ハ二度四〳〵拭ふて面を見せ
ゝ〳〵もゝ事なれ
拭ひ様の事 ○傳
和泉草ゝ曰
茄子文琳ハ高位上鶴也尤盆ゝ載て吉丸壺を此中へ
たる故實もなり 此三ツの小壺ハ下茶を入れす茶杓も小
杓成ゝ茶をせかね様ゝ汲もの事 ○小壺持様五ツ
指ゝ美敷持ツ事 尤胴を掌ゝ附ゝて指一ツ底へ
〳〵 茄子の茶入見る時ハ帛を敷
見るとの事 是ゝハ直ゝ不置事 肩衝ハ五ツ也
胴ゝ附ゝて持事 此外ハ見て能ゝ様ゝ又大海字大開
ハ肩へ大指を前の方へ打掛押ゝて持事 肩衝と
大海ハ小壺の俗字也 薄茶入也
此ゝ云石蕃前ゝ見へタルゝ肩衝ハ小壺ノ次位真行臺子
ニテ茄子ゝ濃茶ヲ入ル、時ハ薄茶ハ必ス肩衝ゝはくる事
と見へタリ故ゝ茶ゝイタス

怡渓曰

茄子文琳尻張丸壺此四ツハ小壺と云形少しづつの替り
たの事此四ツを古来盆に載せ来れ也茶入の内みなハ茄子と
等一文琳之に亞ぐ支故に暖(ミニ)も格別の習口傳尻膨ハ茄子
の影丸壺ハ文琳の影何もも真ん暖ひ賞翫す茄子ハ
指三ツなる持二ツハ底へ當る此類の茶入大なるハ如此持なり
舟海ハ元来薄茶へ多くも真の臺子の時長緒みなく
盆に載せ臺天目と置合せ袋の緒ハ盆の時ハ長緒外の
時ハ花の緒なるも長緒なるもの舟海ハ抱へと云て指
四ツを底に當て大きび一ツを肩へ當る長盆の時ハ勿論其

外唐物金襴の時ハ右のなるなる取り左に載せ置片も右の手に
て置き又畳なるに常の點前の片ハ左の手なる小壺の持
様の通りに下に置舟海ハ小壺に添たる挽茶又薄
茶入なる勝手の架物なる數奇屋園へ出さるる物の
由世間なる云ひ習はせども左に非ず古来なる數奇
屋園へも茶湯に出すハ此外口傳有り大振り成
ハ大海小振なるを舟海と書と云大舟海小舟海と書
ぶ能と云又大開本義の由○肩衝是ハ元来薄茶入也
中興ハ殊の外賞翫致し長緒なるも盆に載来る其中
肩衝文琳ハ角盆なるも丸壺なるも（但一字石菊入ル）但持様ハ矢張

指三ツ〻〻持二ツハ底へ當ツ此類の茶入大〻〻此通り鶴首
柿鐏の類盆に載せ来る惣て大壺の類盆に載事昔ハ
無之由 唐物ハ不及云古瀬戸の類茶入の格好に因り貴人
へ馳走の爲たれハ盆に載ス客に因りもざと盆無ハ不致
〻〻 ○茶入蓋置所四所あり 茶盌の前茶盌の右脇
置の縁 柄杓の柄也 ○鍋壺の茶入ハ鍋口より分〻る加
割蓋なり 此時ハ茶杓を取 茶盌の上に置 左の手にて
茶入を取 右の手を添て置 両手にて 向前一度に蓋を取
裏を合せて下ゟ置き 常のごく茶を汲の蓋する
時も 初めの仕方也 又茶杓茶盌の上に置 左のごとく茶

入を取 右にて茶入を堅め（堅メト堅トイカヾ）直に片方計り蓋を
取 茶を入を直に蓋を爲〻〻 常の通り仕廻もなり 茶杓ハ鍋に
柄置き又客へ出す片ハ常同然 ○累座返〻〻の事累
座めく茶を點る時ハ蓋を仰向〻〻下に亞く惣て
古へ茶入の蓋仰向に置〻〻由利休〻〻其義止み
茶摺を下に置き来るとも此累座計ハ古法の通り仰
向置来る事 如何の譯なるや 道理ハ不知とも昔も
〻〻 殺来る上ハ古法に可随との事なり
○夜會茶入の蓋成程能く見る樣に手前の方に
立て〻〻 但〻〻 夜會の片茶入手に取らざる内

先ッ左の手にて蓋を孔茶入の際に差し置き茶入を取茶を
入し本座へ直して後又左の手にて蓋をする事あり
是とハ夜会に茶入の玉変ぜざる様との習なり

石菊云

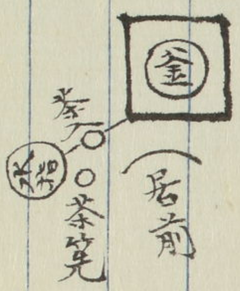
宗和槐記盆點とする物ハ文琳丸壺肩衝小壺此四ツのみ
なり其外の唐物ハ盆に不載唐物點にいたすなり
大海の茶入ハ圍數奇屋へハ出さぬ事 異竟挽淌真壺
の類也猶手に口覆をして莊附濃茶の切したらん片
次ぎ足す爲メなり今も長緒にて出すハ知らぬ事

なり 俗ハ丹海ハ出す事なり ○茶を不残明るハ
大麦と累座とに限りなる事なり其外の茶入にて
不殘明るとの事ハ強て なき事也大麦ハ縁部が始めて
仕初め利休感賞せしと云累座ハ丹ハ藥の掛りしる
物なれハ茶殘なるよう
○唐物茶入の蓋ハ一色なるを八ツ重ねる事也夫ハ形にハ
那すれハ形ハ丸の様なれども裡張の所を未地のする
を唐物蓋と云其大秘事なり人の物を盗がる
今の世の象矢を惜みて裡裏の所を未地とする
なり其ハ格別の事なり唐物の蓋ハ未地にするなり

本式也なぜなれハ盆に置台象牙の様にがたりと
云はぐぼつりと音するがあるなり　常修院様
発と大事となるべし　○三角の茶入ハ二ツの方を
前にする香爐の格なり　○今世間流の茶に茶盌をバ
直しに引寄るなり右のごとくするなり面倒なり
宗和流に限りて右のごとく不用如す左のごとくして
敷板ふ事なり　なぜなれハ右のごとく用ると茶碗
と茶の間へまがのりて隔に成る故なり
○茶入の内ノ底に能く掃ひてもの茶殻ありてもとの也
何の心無くいるると彩茶の中に古くさき香ありて

是をおだ楽と云也此底ひりに附る茶ハ挽茶の
葉をのまして水にて彩に掃へバ能く出るなり
○極大茶入ハ右のごとくして上から鶯づらを取る是習なり
横から取れハ底に夫に故唐物點の如く茶筅を外
するなり　左なけれハ茶筅と茶入との間へまが入る故也
慈に石菊云左の圖ノ如くの置附古書に見て所に記す

炉



茶入甚々大とゆ〻〻〻蓋の小き物ニハ茶杓掛らす茶杓の置処なき物也また茶入の茶杓かゝらぬ程なるハ盆ニ載て茶杓を盆ニ乗かゝ〻〻是等皆大茶入の習也

石藏云宗和槐記何ニモ千表流ニ必用る〻〻

茶炉の點前の時ハ花の〻〻茶碗引寄るとて〻〻

茶事秘録随流傳　茄子ハ茶入の中の頂上也然る故ニ道具の中ニて　天子の御位ニ比する也押出〻〻小壺〻〻加子の茶入を云也真行の臺子の時ハ茄子ものゝ〻〻を用ひぬ〻る〻　此時ハ必ス盆ニ載る也小壺會釋迦

客亭主の作法あり　常の茶湯の時も盆ニ載る時ハ會釈同前也又器〻〻〻載ぬ〻〻ハ茄子も先の茶入のごく粗相ニ會釈あり　○文琳の茶入ハ壺作丸く〻〻口隘く捻返〻あり　清香の如くゆて如何ニも形チ美敷を文琳と云　又何れとも形の知れず〻〻口ふ捻返〻ゆく口作を諸そぎ片そぎと云て口の内外〻〻たるもを又片方〻〻そぎたるもたの〻昔より諸そぎを上とする也兎角形の知まぎる物をも文林と云習す〻る（文筆なきて略す）　右之通文琳と云ひ来るふ二種あり一方ニ捻返〻丸く形美〻〻乳なるめ

らかたる是本意也○尻脹ハ茄子の形の悪き様云昔より長茄子と心得よと云傳なり○肩衝ハ真之臺子の時薄茶を入る用也此時ハ袋ゆみも入れず盆ゆも不載なり又肩衝の盆點の昔ハ茶點なり袋より出して客所へ見せすと雖も置なり肩衝左の手ゆ持て茶を汲時小指一ツ底ゆ掛ル持て茶を汲なり是を肩衝會釋と云也肩衝の蓋ハ板目にして平擂ふ定なり蓋する昔ハ木の目我前にして巣のある方を我右の方になすなり板目ふ挽て蓋を何もの茶入も同前也此外の道具も押並て木目を横になす

置又塗物ハ刷毛目を横になして置なり茶入の蓋斗右の通り不審成故切者に尋れども昔より置来ると云ひ子細を知りたるものなし○湯桶の茶入と云ハ上に提る如く横ゆ鈎を附けるもの也蓋も手桶の如く二枚の割蓋なり袋に入れて置合す時手桶の如く弦を横ゆなして荘置なり點茶の時袋より取出して至片も同前なり茶杓の貝先を常の如く蓋の上に告非て置也侍茶を汲時蓋を前ヨリ下に置左の手をゆし前へ廻し先の蓋を取右の蓋の上に告非置くなり茶を點ふ時ハ弦の前より すくふなり蓋をする

付て向の蓋より〳〵て前の蓋を為すなり
水滴の茶入も唐土の水入なり口を出す口と取手
とあるも也又無なり〳〵口計り有り蓋も
茶〳〵なるハ袋に入る物なり唐製
なり〳〵手のうちを前に為〳〵くのもるなり
桐に置合す時ハ同前なり〳〵然ハ常住袋に入てハ
見立なり〳〵きれ水滴を先袋に入る為り點茶
の時袋より出〳〵左猪口を右猪口の構なく
取るのうち左のもの内に為〳〵口の方を指先の方
に為〳〵置なり茶杓ハ取るもの方に見先を靠
て茶を掬ふ時ハ右を左をなし〳〵てよ〳〵なり
蓋より返りて後自然桐に上ケ置時ハ又口を先に為〳〵
て上ケ置なり右水滴の今釋に古人も秘傳せられ
なり然を古袋に入て莊置件或ハ水所望の後自然
桐に上ケ置時ハ口の方を先に為〳〵て置く依て茶點る件
家流毋の時出〳〵置時ハ口を横に為〳〵時に因り
茶入の面相通の義不審あり思ひ隠る功者に尋たれ
ども昔よりの法なりと近こて存知の人無之然ども
古今ともに設り来る義を法と定め置事も弘べし
然ども人の道理も有さに此水滴斗り時に表裏

表道の義無詮事なり
古法を破り袋に入れ座敷相に荘るなり又其儘にて相
上置けば茶點るなり面を前にして茶點るなり
取るを徧なり茶事は茶杓を取るに掛茶為なり
茶器の義なり又書院水入と硯と置合す片
水入の口取るを横なりて餘置用口を先にして
置事 愈不審なり但古人の深意は凡慮に及難し
後勘也 手壺の茶入は水滴の口なり取手計なる
物なり又釣瓶と云も同然なり手壺の會釋ひ
水滴因前 墨室の水室も同事なり

正傳集有楽傳

肩衝茶入の位は茄子の次なり定むる真行の臺子の時
薄茶入は用袋なり無も載ず肩衝は圓座の有も
あり則圓座肩衝と云○背の低きを半肩衝と云
南部の土門源三郎所持の茶入半肩衝也又志野宗温
が半肩衝とて名物あり○東肩衝と云あり肩のな
だらかをとつふなり當世取責が詞に茅の子と云
肩衝には八ヘらの有もなる○肩衝會釋と云は茶點る
時右手にて寸るは眞の會釋也左にあて持は肩衝
の底の小指一本掛て持也茄子の茶入と肩衝の茶入

以て真分の茶入を一の心得又丸壺の類ハ手も載て持も
する也○丸壺の茶入ハ筒長くして口の短を好むなり
蓋を茄子のふくと同様落入蓋にて摘貫ツク也
柿の茶入ハ平柿形も似せて焼くる物なり　堺の伊
豫屋が所持の茶入名物也口の下も柿の帯焼附たる
物なり　真形ハ丸壺にして肩のすぼまたる物也
但し帯の焼付たるを称なり○鹽蹄の茶入
て茶入の口作り鹽蹄も如くして名号く
丸壺水滴等も鹽蹄の口作多くき物也
○鱒形の茶入鷹の餌簀にも下用たる物も

酒の樽も如くする也（石茶碗云）
○累壺の茶入ハ形大概丸壺の如くして口の際に鐶を附くる
如く焼ツケたる也○湯桶の茶入ハ口の上も提る様に取
手あり　蓋ハ手桶の蓋の如く合目を切通してツクもな
く二枚の割蓋なり　堺の薬師院所持の湯桶ハ後に
赤井豊後守所持にて島物也　湯桶ハ袋に入る時も
蓋の合目上に成る方の蓋を面に用ひて前にする也但
袋ハ丸袋なり置合すに取るの鍋を横に置合也
○水滴の茶入ハ水入なり　水出口と鍋と附くるを
水滴と云なり　鍋なくして水出の口計り附たるもを

水滴を袋へ入る時ハ釣を前にすゝ口を向こなしてへる
架ハ置合すれも後手より持て出る時も釣を前
みなゝ口を向こなす手茶點る時も如常袋捌して
釣の方を我左へ口の方を右へすゝ置ク茶杓ハ左
の方の釣へ掛ケ置なり（一説ニ菊云左勝手右勝手とも同
様なり口の方ヲ右へするなり）
客へ出す時も面を客の方へなして出す客より返
し架へ荘る時ハ口を向へなして置ク也是を水滴ノ
會釋と云古人秘傳へ仕来る也○手瓶の茶入も水
滴の口なゝ手計り附たる物なり是を釣
附とも云也島物へ多ゝ會釋水滴同然也

袋も丸袋なり長紐短紐とも用る也
茶湯湖月抄宗左傳
手瓶取扱様手を釜に背けて遣ふ口のあらハ釜
に向心得なり茶をはくハを手を向にする也其
時ハ蓋を拭に向ふ前へ拭なり○釣附置附る時
ハ釣竪へ置ク也拭様老松の通茶杓釜の方へ置き
手を横へ遣ふ事もあり先ッハ不用茶杓釣
の内へ入置也○水滴ハ手瓶の通也口を釜へ向るなり
拭様同然○油滴水滴の通取扱ひ口を釜附へする
なり○耳附ハ耳を左右へして袋へ入る右さひ様

身形にきるゝ茶をはくけ耳を竪にする者也拭
様を瓶の通り但し小き耳ハ左の通り廻し拭
るゝ。茶入の蓋に簪のあるを茶杓に背け茶杓に釜分に
ゝるゝ

茶譜宗旦傳

利休流茶入の蓋を取て茶を掇け蓋の置所茶盌
の脇ふ置きてよし　若し肩衝の蓋平づくの蓋ハ闕の縁
右の方隅へ寄ても置く然し茶盌の脇ふ置よりも
劣る也小壺の蓋并瓶子蓋ハ茶盌の脇に必す置ク但
蓋を指先で打返して置ク　右宗旦曰ク肩衝の蓋平づく

の蓋にても茶盌の縁瓶子蓋の類ハ撮高き方蓋の裡を向へ
き所の方へ打返して置く　右宗旦曰ク肩衝の蓋平づくの
蓋にても茶盌の縁程抜き亟所ハ無之と利休常に云しと
語り申ふ又茶盌の形に応じ人もあり少なくなり云々
蓋を打返して置も又ゆるり縁に持せて置くも置ハ
むさ〳〵茶ハ貴人も卑〳〵召す故其遠慮に蓋の内を
打返して置と云々然ども客人茶入を見る物も蓋を
取り置に応じ打返して置き云々
石蕊云文言不伝累座返して累座の蓋を返し
て置るに応ずれり　保　粘溪和尚云説ようれハ古へハ茶入の蓋
仰向に置　由利休より千義止に茶スリ下に置キ事なりと

又累座斗り、古法の通り如何の譯もや道理ハ不知とも
古へより仕来りを上ハ古法に可随とかや

茶道望月集宗旦傳

茄子の茶入を用ひ茶を匙ふゝ相引逆ラ茶入と茶杓と
茶盌の上みて引合ふ〳〵てすくひ入る事〳〵猶小壺
の掛りと云ハ茶の掛りにくき時茶入を前より少し向
へ打り傾向る樣の手をみて汲出す仕方なり往古ハ
極秘として二十年の秘なるとらてハ許さざる事と
云々○肩衝の茶入を持ハ底へ指一本も掛けず能
茶を汲む時ハ其茶入の丈ケ三分一の上を茶盌へ掛る

構本字

恰好ゐ構へて茶を汲入ル能ミ○大海内海の茶ハ茶を匙
る舍欽ハ先上に掛り茶杓を如常取り左ゐく其茶
入の左の方三分一程の所を上より攫取の心持にて前へ取
右の茶杓持〳〵人指中指の先を一寸茶入に添て左の手
の平に天目据に載せ大指先ハ茶入の肩に掛け偖三本
にて茶杓持るゝ事その蓋を取る如く蓋を取りて
茶をすくふ事なり○湯桶茶入置合す時ハ弦ヲ前
向と置くなり袋より出し〳〵點前の時ハ人ニセハ
手を横に見て置也此時茶杓を掛るハ弦に傍向
に掛るなり又蓋の角へ貝先を如常掛ハ為

み突かせ茶もよく中略茶を汲この時ハ茶杓を取上
ケ右の茶杓持てる大指人さし〜と二本の先を真茶
入の胴へ一寸添て押廻し〜真弦を向前と〜真右の
成りたる片方の蓋を一寸上ケ前をもあげて茶盌
の前の茶摺を仰向置き又如元指先を附て押廻
し片方の蓋も如初取りて初め仰向たる蓋の上江
此蓋ハ傍向て持々セ掛ケ置備テ又弦を向前と如初押廻
し右の茶杓を持ケ直〜茶を匙へ入也又此茶入大形
なる時ハ其割蓋を二枚とも取ふ不及此の如く會釈
片方計り取て直て會釈として左の手へ大海据ゆすへ

片方の蓋を大指ゆて押へ持居て真片方〜〜拭ひ入る
〜〜〇水滴茶入手瓶同然なり置合時口ハ向なり
〜拭事是も蓋計り拭て胴ハ拭事なし依
茶を入ると客分き手を勝なる
〜置合すなり備茶を汲のる時茶杓取左て
て茶入取上ケ茶杓の方右の指先二本ゆて會釈
此片ハ口を向へな〜〜手ハ前の方へな〜〜持締
備蓋を取茶を汲へ小形ハ指一本を底へ掛
大形ハ三ツ及ばす〇耳付の茶入小耳なるハ
蓋を拂ひ耳を除て胴も拭事能く耳大な

らず胴を拭ふに及ばず上計掃ふて其所へ遣すなり
茶筌を置合し耳を左右へなし茶を汲む片向へ押し
廻し耳を向前となし耳のなき方より茶
を掬ひのる供茶碗を茶盌一預けて後茶入を如元
耳を左右へなして戻し置べし
常陸帯とハ肩衝なる腰帯の筋なり唐物也
此會釋は其帯を掌駢して名あるゆゑ
其帯みるを掛けず竹物を生けて扱ふを習
ひとする也○胴高の形迎あり是も會釋物
の一ツの名也胴ゆゑ張たる所めて持て締メ會

釋を習ひとする也○罇形之ハ肩衝ゆゑ肩にて
張りたる物にて下にて殊の外すぼまたる物也
此會釋ハ細き口く指を掛けず上張たる所にて
持締メ茶をすくひのる會釋也○尻張ハ瓶子
づくの蓋取合ノ也此蓋一ツの會釈有釜を摘ミ蓋ノ
取りて下に置片横にこかして蓋裡を勝手の方へ
向の能掛て仰向にこかし置き備茶を汲入る事
なり蓋するに片しづくを持てするも必すとも云
も非す是瓶子づくの會釋迎昔より一ツの心
得とする也其榎の實づくの蓋ハ指二本にて両端

を形締めづくゆ障らめ物とする〜○又大海などの
大蓋ハ指三本にて壺の蓋取心持に取る也平づくの
大振り成る蓋の代ハ人差の先をづくの上へ當て押へ大
指中指の腹にて蓋の両端を持事よ〜

三斎傳書茶

小壺廻〜と云事ハ茶を汲る代人の目に立ぬ様み手の内に
て汲る様に茶入を少し廻し〜茶を汲出し〜て茶入を引
事なり○小壺の捻りと云ハ茶を汲出す代茶入を
少し先へ捻り茶杓を前へ廻〜茶を振掛候様にすく
ひ茶杓を壺の口際へ引き壺の口外〜さはり壺の底の

上る様にして○際にて茶入を引き茶杓ハ抜かず茶入
を抜様にする也と仰也○茶子尻張り大柿等ハ手の腹に
載せ持て茶を汲る也○大海ハ肩へ大指を掛て指をふ
つくりとしてかゝめて持がよし○丸壺鶴首抔ハ
指を三ツ底に置て人差と大指とにて持て茶をすくひ
申候○茶入の面と云ハ大方薬のるだれの方なり
此處を客の方へなし置事なれども巣蓋閉蓋
なれハ表を我前に置但し一様にも云難し　水指前へ居
掛り客方になたれ薬候はゞ茶入のなたれ我前へ置
客見被申代ハ景を客の方へ出し候へバ我黙前の中

ハ我身ニ對シ置ガ能シトモ云ヒ茶入の居掛リ又ハ藥
ふ囲リ有ル台ノ我前ノ方ニ定メテ被申候○割蓋の茶入
ハ先ツ弦ヲ横ニ持テ蓋ヲ取ル片右の手を添テ茶入を
少シ先ヘ廻シテ大指と人差と二ツとて蓋を狹き樣に取
下ヲ仰向て横ニ置キ又茶入を廻シテ右の如く蓋ヲ
取リ下ヲ置タル蓋ハ俵向て持セ掛置ク也尋ニ至ルも
蓋を至ルも右の如シ昔シ如此仕候由古書に在リ
○二ツづるの茶入ニハ指二ツとて両耳の外を摘ミ蓋を
取と古書に見へたり○両耳を茶入ハ弦にても耳
にても大指と人差とつるを置て茶を汲ミ

申候○片耳の茶入の置合セの片袋のまちの耳
を出シ緒の本留を耳に載て耳を水指の前ヨ
ナ〳〵至キ有指を離して置片ニ耳を先ナ
す茶碗ヤ片ハ耳を左にして其耳に茶杓をか
けそも置ルり大耳なるハ耳の内へ差入ても
置ルり取置ク片ハ耳を我前ニ置シ者ニ見せ
ヤ片ハ耳ニ構ハす景ガ居掛りの方を先ニして
出す居掛りもなくば耳を先にして出す仰て
○水滴ハ口計りあるハ口を前にして至く脇へ口を至
べからず茶を見せヤ片ニ茶を盛る片ニ口を右の方

ゆゑ〳〵置くなり取出ハ口を先こして引前ゆ
えに茶なり○湯桶の茶入にて茶點ハ片ハ蓋を前
より取て計なり是ハ別義なり

普齋茶湯十条書

象牙の茶入蓋葉蓋ハ一文字に前にて蓋を手ずる也

點茶法薄茶入之事

棗の茶入ハ上下とも丸く形ち棗に似る故名附く元来
茄子の茶入の挽様なり故に茶を汲時も茄子同様ゆ
底へ指を掛る也 大中小あり 草の茶湯の片ハ其品
ゆ因り袋に入て茄子の代用として濃茶を入出すなり

平棗と云あり是にも大小あり扱ひハ大小に依りて
大海又ハ小壷の如くなす也
中次ハ角立ち蓋と身上下の真中にて合ふ故に此名也
元来肩衝の挽家也故に茶を汲片も肩衝の如く底へ
手を掛けず又中次ハ草の茶湯と雖も袋に入濃茶
ゆ用る丁ハ無〳〵と云一説に棗ハ袋に入金輪寺頭切も袋
に入も中次ハ帛に包に吹雪ハ大津袋に入ると云事もあれ
ハ一概とも定め難きなる蓋〳〵 又侘の事なるべ〳〵
藤重作等の能き中次を袋柄に一ツ置て〳〵荘片
ハ薄茶入なれ共數紙を用ゆを習ふなり是ハ中次

元来袋を用ひさる物なれ一ツ置の片ハ此會釋を爲すと
の説なり　敷紙ハ奉書杉原の類四ツ折にして二寸五六分ヲ
四方とす　手前の片ハ中次取り下し　次々に敷紙取り懷
に入る後殘莊になす片ハ又懷より出して敷中次ヲ
載るなり
吹雪茶桶匙等ハ皆中次の類也會釋し亦中次に同
臨器も中次の比屬　上下の角帋帳面を取り輪
底ふくれ黒く塗り帋帳面計リヲ朱塗にしたるも
頸切ハ皆口ふくれて打きせ蓋（ふたつ）ハ木地塗丹ハ
黒塗也　○金輪寺と云ハ頸切と同様也是ハ

後醍醐天皇吉野に於ての勅作也と云傳ふ故に薄
茶入れとも盆片木等に載せ又敷紙を用ふも也
藥器ハ元藥入るるを茶入に用ひ也　外朱内黒
の塗也其外かつらの白粉解等種々の形あるべし
と雖も其形に随ひ前條の茶入に準じ扱ふ也
薄茶入に茶をはき入るるハ中高に入るべし　扨形丸形
なるも色々はき入方有と云或ハ時節に因りて換る
と云ひ茶入ハ低りて美（ミナ）あるとも云ふ説あれども
別段故實なるも非ず人々の好む所に任せて可
なるべし　但し茶をはき入るるハ絹に入て茶をバ

そ[illegible]〳〵動〳〵真上に又好む所に入るゝ茶孔をさるなり

薄茶器の蓋置所左勝手あるてハ右右勝手にてハ左而して茶盌の横我が膳前に角掛て置也但し頭切の如き茶摺の蓋ハ通常濃茶入の蓋の如くなすも也

大束にして濃茶黙るゝハ茶を拂ふを能とす普常みてハ拂ふハ賤敷見なるゝとて古来之を嫌ふなり

但〳〵侘ハ拂ふも格別也とす

拝領の品ハ総令薄茶へと雖も片木に載荘置なり

又敷紙に載るもあり

正傳集有楽傳

中次の茶入ハ塗物也肩衝の化也濃茶を茄子真丸き茶入に入たるゝハ薄茶必中次に入るゝを用るなり

束の茶入ハ茄子の化なり故に肩衝に濃茶をはきたるゝハ薄茶必す束にはきを用るも宗易或ゝ小束に濃茶を入て袋を掛ケ中次に薄茶を入れ茶點〳〵事あり惣して古へハ焼物の本茶入ハ細々小壺敷へ出すゝなく束中次等を專ラ出せ〳〵なり

茶湯流傳集遠外傳

棗を帛に包み濃茶點るときあり包様口傳小茶入坏も
色む色帛を習ひしたがひ作去傳手次第也
○棗の蓋ハ割蓋に取中次ハ抜蓋に取棗を持ゆを
左手の小指を底へ一ツ掛て右中次頭切ハ指を掛へ一
文字の形 ○他の点茶の代棗中次等を拭可からず
中の茶崩るるなり ○金輪寺ハ後醍醐帝勅作
也則寸切也胴ハ一文字にして蓋こんもりとして
身にして蓋身へ一分計も出るなり 木生ハ南天
の根なる由又五葉松鷲なり云石蔵云勅作ハ蔦
なるなり ○棗に茶を入ハ抜形○中次頭切

ハ一文字にして上のぎを立る
湖月集宗左傳
棗に濃茶點るときハ後薄茶に吹雪中次金輪寺
或ハ焼物の類を用濃茶を棗にて點後薄茶を又
棗にて點るハ不宜○濃茶にて棗を取扱ハ茶杓を持
茶を撥出して直に茶を均し直に蓋をかぶす又
茶杓を持て蓋をとり棗を置ケ様
濃茶の通り取扱ひ右の様なり
和泉草石別傳
中次の持様五ツ指二ツ中次の底へ當て持て蓋を取

中次の蓋と下と両方へ引合つ様に蓋を取物なり
茶杓は中次の蓋ノ角へ茶杓の當らぬ様にとの用捨也
棗中次帛にて改る事
拭様にこの三ヶ条中次は上角に當らざる様なり
度拭心持にて眼も少し拭く心得もなり又蓋ノ
上計拭様にて孤は其侭置合はす方増なり
棗中次帛會釋功者を見覚べし茶桶吹雪も中
次同前也棗中次茶桶等にて茶點に近代は帛にて脇
を廻して改る也是勝手にて改めたるものを又座敷にて
入らざる仕方なり古来は茶入取上げて上にて卒度拭様

めにて孤脇も卒度拭心持なり

宗和傳梅記

棗の種類常修院殿の御吹聴に織部が利休大棗
を乞ひ即ち出して遣せしに喜びて明日は
是ぬく御茶申度由申帰る跡にて利休云織部如何にて
大棗の茶を調べきの心元なし迎明日参りしに
先ッ棗を裸にて莊附備茶點る時茶杓持るからに
棗の茶を残らず拂ひて點たり利休帰りて云
織部も只者に非ず出来したりと賞せしとかや

大棗々ゝ茶を澤山入れたるハ點たる跡をもむさ〳〵
總て之を限らず棗の會釋を大事の一也（常修院殿云）
真形をも見すべし〳〵 迎月々拝見す中暑箱上下二ツあり
真二ツ箱の内袋入の棗六ツ宛以上十二あり 真丹見覚へ
たる形なり 曾て見知らぬ形もなり 皆見を紹
鷗の利休のと云て宗匠の物好の様を云ハ誤り
也 形がかゝ無ければなら〳〵ぬ事也是秘事也
人々語可らず 大脇棗は茶入の挽家也 故
文琳丸壺肩衝を始とし 夫々の茶入の形に應じ
て挽家ハあるべき物故唐物共四の挽家に在形よ

り外ハなき筈也と合点すべし〳〵 是と大事の習也 ○棗を濃
茶に用る事上暑必出さぬ事ハ有らず是も大事の一也
云々然れば出さで叶はぬ事あり や否必ず出さで叶はぬ
事にもなる〳〵 暫ありて茶桶の茶を知れりや
との仰に成て はつと感し奉る茶桶にハ一ツは
茶入一ツハ棗也然れば入て既に點たる跡には棗
にて點るからは假令書の茶に茶入を用ひ
夜に入て又濃茶を點るとか又は客既に一座
過て相客好へ參らんゝ棗を出すべき事也
と仰らる ○棗を帛にて拭ふ〳〵の字を書様ゝ

廻〳〵て先の方にて下す吹雪ハ直に拭ふ併し斯
樣の事も目に立ぬ樣人に見取られぬ樣にす
べし　○或人云茶を盛に棗と中次迄ふ棗ハ
次服中次ハ平に盛と如何と問ふ盛事ハいざ知ず
汲ハ棗ハ脇から汲ミ中次ハ中からたれハ盛事ハ
たゞ有べし
千家　朱棗ゐ黒茶盌ゐと會釋ふ事ハけば〳〵
敷て不面白　○薄茶にて棗等の茶を向を汲む
ゐ事　○真の中次ハ濃茶薄茶ともに用ふ
○仙叟好の棗を他流ゐて〳〵河太郎と云本名に非す

黒塗の外ゐ〳〵　服ハ藁器の類ゐて蓋の上落入たる
物ゐり　○あこだと云棗ハ如心齋好ゐて南仏の形
ゐく堅に成の筋あり　溜塗の薄茶器也　○如心齋好
の棗ゐて蓋の上に品如此蒔繪の棗ゐり　○短冊ある
棗ハ勝手物ゐて茶銘を記〳〵玉ゐ為短冊ゐり　○棗を
茶湯ゐる事別に差別ゐ〳〵　猶ゐ次事に用ふ
牧木普齋　茶湯十卷書
大棗ゐ〳〵ハ一服茶を入し一汲に二汲に茶盌へ打明たるも
さび〳〵き物ゐり　小棗ゐハ茶ゐる樣に入を〳〵
大茶入ゐ〳〵も只一服入茶ゐ〳〵きり〳〵と云も錆をおか

しき物なり　打ものなり

濃薄茶器數品有之茲ニ記　塗物茶器

真中次　藤重作八竹ノ木地外檜木地　棗　紹鷗　大中　小

棗　利休　大中　小　大棗々　盛阿弥形

菊ノ蒔繪　大中　利休　桐ノ蒔繪　大中　日上

目張柳　中　織部好　元伯好ノ菊　大棗々

淄棗々　大ト小ハ猫ノ木地中ハ松ノ木地　元伯　就鳥　盛阿弥作小棗々ハ尻ヲ切ル

回首　就鳥ニ似タル名大棗々ハ元伯名号ヲ失名ヲ付ル　撫子　仙叟名　就鳥ノ異名

尾張　黒中　利休形　平棗　大中　利休形　大方後補

白彩解　中　利休形　一服入　利休形

茶合小　仙叟好　河太郎　仙叟好　大斗リ

河太郎　仙叟　覚々斎好　梅繪　中　了々斎好

一閑折溜　啐啄好　不識　了々斎好

金輪寺蔦大中　金輪寺松　原叟好　老松ト同木製

金輪寺　一閑中　元伯好　後ニ如心斎金輪寺ト一閑割蓋ノ大棗々五十製ス覚々斎好ノ内ト有

如心斎金サラ井ノ袋ヲ好

老松割蓋　原叟好

右茶道筌蹄ニアリ

塗物薄茶器

茶桶　大小　黒利休形　淄元伯好

茶桶挽淄 大一名利休形 同如心斎写

雪吹 大小黒利休形 淄元伯好 金のヒナタニテ菊桐ト甲ニ書タル

大小原叟好

面中次 中黒利休形 淄元伯好 淄中次ニ元伯詩中次ニ

又詩中次写ニアリ原叟好 如心斎又数五十ヲ製ス

薬器 利休形黒 仙叟好ハ蓋河太郎兩様アリ黒

頭切 黒如心斎好松ノ木地スリウルシ黒ニテ桐ヲ書タルハ

ヲヽ斎好也

南瓜 本字阿古陀瓜ウリ 如心斎夢中ニアユタ瓜の形ヲ得テ好ム

山中宗有遺愛之櫻ノ木ヲ以其男宗智天然ニ茶

器ノ好ヲ頼ム丹黒外淄蓋木地なり

蔦 元伯好丹黒甲スリ漆真餘木地

一用張竹 折淄 二品 如心斎好

竹ノ一用張ハ蓋の見返シニ判有

折淄ハ底ニ判有 今ニテハ竹の茶巻 折タメの

茶巻ト云

右之外ニモ代々宗匠好モノモ有之ト云既ニ余モ吸江

斎好竹ノ茶桶所持ス

楽吉左衛門製作之分

水滴 湯テキ 手瓶 釣舟 瓢箪大 赤黒

仙叟好 鈔月黒 割蓋共 如心斎好 白雲

但珠光時代象牙蓋ヲ以好シ之

塗師中村宗哲 俗名八兵衛ニテ製スル品

菊大棗 利　菊小但中ヲ用　桐大棗 利

桐小但中ヲ用　淄大棗 元　淄中 松ノ木 元

淄小棗 元　菊面棗 元大　ツホ〻〻 如

紹好大中小棗　大茶桶 利　葛(玉輪寺 啄

葛茶器 元　高臺寺棗　鼓鳥棗 利

真中次 利　平棗 啄　菊中棗 不及

道好大中小棗　松木梅棗 了　松ノ木桐寸切 了

飯器棗 紹　大棗 利　朧色ニ仕立極上々ノ品

河太郎棗 仙　豆子 利　利休大中小棗

下張棗 利　白粉解 利　一腹入棗 利

大雪吹小吹雪 利　藁器 利　茶桶 利小

面中次 利　寸切 利　以上大棗ヨリ計十二品 利休十二品云

大棗小棗 覚　秋野棗 利　目張柳 カリベ

割蓋茶器 覚　金輪寺　淄雪吹小大 元

菊桐雪吹小大 覚　阿古陀形 如　淄面中次 元

挽淄茶桶 利　吉野面棗 全　溢梅棗 了

面中次 カリベ

飛来一閑ニテ製スル分 飛来ナリ飛来ト云ハ如何
ト云ヘハ 肥後ト云カ 肥前ニ高来郡
高来ト云カ 松平主殿頭在城

不識棗 ラ々好 頭切 元 竹茶器 如
金輪寺 元 老松宣割蓋覓 雪吹小ク 元 溜
雪吹 元 溜 利 形棗大中小 藁器 利
茶桶 小利 白粉解 利 一服入 日
折々茶湯棗 元 下張棗 元 吹雪 大小黒 元
溜棗 大ト小 元 溜棗中哥 溜面中次

點茶活法茶入器物篇ニ曰
點茶之時茶入ヲ取扱フニ眞行草之習アリ大別ヲ
云ハヾ 盆ニ載テ莊リ其取置モ右之手ニ持チ左
ノ手ヲ添テ扱フヲ眞之會釋トシ○盆ニ載セザル共
茶碗トモ又茶筌トモ置合ハサズ取置キハ必ス右ノ手
ヲ以テスルヲ行之會釋トシ○茶盌ト置合セ茶筌
ト置合セ真ノ取置キモ左之手ヲ以テ繁ルヲ草之
會釋トス尚真詳細ハ式正茶法ニ記ス
宗和槐記ニ茶を不殘明る事一大事と累座
と限りたる事なり正木の茶人ゝ茶

不孝のもとと云事ハ絶て久しき事也大寒谷田
織部と云ハ始めて仕初め利休感賞せしと云累座
ハ丹へ摩の掛りたる物なれハ茶弟らぬがらし
東の種類常修院殿の御咄しに織部が利休大寒
を毛しに即チ出して遺せしかはなびて明
日是を以茶を一度由申ける跡にて利休ふ
織部如何にて大寒の茶を調べきか心元なし
迎ひ来りしに先づ寒を裸にて莊附借ラ
茶碗にて茶を持かゝ東の茶を弟らず掛
ひて碗にて利休帰りて云織部も只者に

非ず出来しとたりと賞せしとかや大寒を拾
ひ茶を濯ぐ山へきたるハ跡迄もむさ
惣て之に限らず寒の合羽ハ大事の一也云々
板木普齋曰大寒ものハ只一服茶を入て一汲に二汲に
茶処無に入て打明たるもさびしさ物なり下寒に
ハ茶殘る様に入して能く大茶人なりとも只一
服入し茶ものとてきしまし云も錆てお
かしき物なり打明たるもよ

茶入袋之事

茶入袋ハ茄子肩衝ハ限らず何の茶入ハ唐物の茶ハ緞子漢道（郎鄂漢東廣東漢島）等も作る蜀錦もある真他重ル唐物織を用ふ（錦ハ金襴なを用）瀬戸真外國焼ハ金襴緞子真他和漢の織物を倣せ用ふ裡は海黄（甲斐絹）縞甲斐絹紋甲斐絹自然ハ緞子をも用ふ古昔名物ハ紫の緒つかりを好ミ由なれ共今ハ各色を用るが如し

緞子金襴銀襴漢島ハ他も名物切れと稱する物

数多し　袋ハ茶を明たるもの又九袋と云もあるなり　○茶入の袋昔ハ長緒にして結形もいろ〳〵せし也（梅樹真外草花鳥虫等にも結ぶ）珠光の投頭巾を短緒にして結び目を心の封になせし　今の蜻蛉結びと成るを云ひ或ハ紹鷗利休の頃ハ短緒に成るもふ但し現今も茶入に因り長緒を用るもの　大海飯銅の類ハ多く長緒なり

石蕎云千家にテハ老松に長緒ヲ用ハ也外平欣の茶入ハ長緒を用るなり

長緒も短緒も現今ハ皆蜻蛉結び也

茶入を袋に入様ハ茶入の前を袋の方へ向て
入るなり　但し水滴手瓶等の茶入ハ手を前にして
入るも湯桶丼等ハ蓋を横にするなり也
袋の緒の結び様ハ上下なき様に茶入の瓜取真中に
在る様にするなり　紐の留の方袋にひたと着たるハ
見立能らす又びんと能たるも能らす直なるぶ能
（不蔓斜にもあらず）中のはを出るもなし
昔ハ袋の緒同じ結びにして相違あり由くり
際にわなを拵るあり直ふ引通すなり　結び目

を高くせしあり先を高くせしあり　両方の
わなをひねるなり　長くあり　短ぶむあり
種々せしと云是即ち心の封なる金
袋の緒大成茶入ハ結びて少し短めにな　小成る茶入
ハ結びて少し長めにする是立能き なり
袋扱唐物の袋ハ見立輕く會釋ひ新しき茶入の
袋ハ如何にも高くなる會釋能し
東々其他の茶入を帛にて包み濃茶入ハ多くする事有
是亦侘者の事也其仕様ハ帛の角を上ハ角にして
一ツの角を我前にして（右の帛云帛の切目ヲ右ノ向）

擴け真真中へ茶器を置き手前の角を茶入に打きセ
次に右をおきセ次左をおきセ向の角をおきセ右左
ゝ打きセたる帛の下へ向ゝ打きセたる角を被
む也○手前の角ハ左の掌に載ゝ被たる帛の端
を引解き風き茶器を右の○ふ取て下へ置偖我
前にある帛の角を右手に取りて直て帛捌をする也

大津袋ハ元大津驛にて米を入る袋に倣ひ羽二重
等にて製したる物也 吹重にて包む時用又帛
を以包むもあり物も保看の用也

大津袋と云物ハ壁言ハ帛の両角を折て綾附たる也
點茶の片袋脱がせ様ハ茶入を膝前に置き両手の中指
を以両わきを押て結目を寛め結びを解き茶入を
左へ廻し（記菊 茶入を両手にて右へ廻し 也）
但し右廻しハ茶磨也
組留を能程引出し 偖纐を向の方より指
二つ三つこきを擴げ次に前の方も同様に右へ
茶入取上ゲ左の掌に置き右手にて茶入を持左手
袋を持茶入を取出す也 此時唐物及秘蔵の
茶入ハ袋を下ゝり抜き取也

石菊云 長き茶入ハ袋をちく板く茶へふきハ上茶のを板
〻云事も何〻
袋脱がせて後長緒は双方〻より打違へてたゝみ又
短緒は袋の内〻收む
石菊云千表流〻てハ長緒ハ習事の内〻て口傳なり
短緒ハ打通〻て真荘〻より定座〻置く
千表流〻てハ左の掌〻載右のゆ〻く總を持〻く
左へかゝすゆゝり
袋脱せて後袋の置所四畳半運ひ手前〻てハ水指と
勝手壁の間（石菊曰濃茶の時ハ中立のゆゝ濃茶へとゝ荘炉ゆゝ前の事と知るべし）

臺目構〻てハ中柱の釘へ輪紐を釘へ掛ケ口を我方へ向
る（石菊中柱なき臺目構の時ハ
茲〻石菊曰四畳半及其他袋を置ハ袋の口を向へゆ〻底
を前〻ゆ〻て置ハ例ゆゝ〻心得た
向切炉〻てハ水指と指ゆゝの壁の間大棚物〻てハ天
井の勝手の方前通り小棚〻てハ天井の真中が棚と
壁の間が〇風炉〻てハ風炉と水指の間夜は建水
の向ふ〇長板三ツ置建水の向（石菊云長板の角左前ハ
一ツ置キの時ハ風炉〻て水指の間〇道具なゝ〻の時ハ
勝手の間板の上何とも口を前〻なす事（石菊云口を
向へ）

二つ袋の内ハ動ね通くる也。（茶入茶盌とも袋へ入て荘る片ハ出靖蛉入靖蛉こなす也）客ハ出す時ハ扨茶を下座の方へ置ふ口を客に向るなり

不蒔扨茶を上座伊達を客に向て置上座下座の差別なく扨茶を長緒の袋を釘に掛る片ハ輪紐の方へ扨茶の所をまをひ而〳〵釘に掛る也（不蒔短緒ハ如是長緒ハ釘に掛る例ハおほつかなく）

茶事秘録随流傳

茶入の袋唐物にハ押並て緞子を用来る也昔より邯鄲布を好来る也然とも稀成物也瀬戸にハ

金襴を用是昔〳〵の法也

一尾伊織茶書

茶入扱ひ其形に因替る事也肩衝ハ袋の角へ手を入肩衝を持て袋を下へ抜也其外の壺ハ茶入を上へ抜なり大事の茶入ハ袋ごと下へ抜く也

千家要録

茶入袋平手前ハ茶水指の脇勝手の方へ置き旅箪笥ハ炉風炉とも天井の真中とも又舟の上ハ炉とも勝手の方とも置○江岑棚ハ上に薄茶の器なきとハ上の真中ハ置とも濃茶の片方

大方上ゆ茶器あるを爐風炉とも上の前
猪手の方へうせ五ク又引出しゆ入れる也
○四方棚丸小卓桑小卓高麗卓是ハ上の真中ニ
置ケ共濃茶の片ハ薄茶器アル故勝手の方前ノ角ふ
置く○長板ゆてハ翻ノ先ゆ置く中置の片ハ翻ノ後
ゆ置也小き袋の片ハ板の前隅ニも置也○袋棚紹
鷗棚類ハ都て勝手の方の前ニ置也（石菊曰勝手ノ前ト云フ則
天井板ノ上ニ置と云事もあらん）○小板ゆて炉風炉
とも風爐と水指の間向へ置也○都て袋を置片ハ
緒の打尚を爐風爐順逆共ニ水指の方へ向て置

く客へ出す時も茶入の方へ向て出す○中柱へ掛る
片ニ打笛前に成様ニす

茶道望月集宗旦傳

茶入を袋ゆ入れて座敷ゆ置合す付其紐を結ぶ事
等一晴かゆ事もあれ共當時其吟味ニ及ブ
人少き故ニ何事も大方異様ゆ成行何の品もあ
く結ぶ事なりゆ古法の習心得を先其日の濃
茶入を結ぶ事勝手ゆて為すゆ事あれとも
其法ゆ扱はざる付ハ怪我する也依て茶事の
式法仕附ハ人の目を惑はせん為に古人法を置

ツヽけ

もたる事〳〵めでハなし〳〵只真道理に叶ふて勝手
も能ことの吟味なれハ人前にても勝手みてもも差別
なし〳〵只内外の隔なく萬事を嗜む事を數奇
の道とハ云也悪く心得ぬれバ數々の物を寄せ集
めて真事に僻する丁の様に心得るハ物毎異様
ハ成行事此心得違ハ皆誤り来る也茶事の
筋古ふも常を晴客を得て晴を稀なと心得よ
と八古人の金言也晴の片を晴と客に呑まれて仕損
る事多し常を晴と嗜て晴を得て晴を
無禮もなし〳〵主客共ハ心を附嗜み興ずる事
ハ此一種を感味せんが爲なれハ勝手迚も少も畧

誓
すれ
ハ客
呑
まれ

義なき様ハ嗜ミ可認なれ　○茶を挽ハ〳〵如
法茶をはき入て後蓋をせずして袋を探り口を
開き紐の打茵を向へる〳〵て左の手の平に受て
右ハ茶入の肩の所を持又こ〳〵きを持て左の手
の袋へ茶入の面を前〳〵て納むる也借て蓋を取
て巣のある蓋ならハ巣を我が右の方へ〳〵て
蓋〳〵て借て右ハ置ハ置き真紐のわなの
所を右に〳〵持つがり際の所を左の手を併向て
大指を下ハなし〳〵上〳〵人指中指二本と三
本にて引へる借筥と引締て袋のひゞを結く

直〻一重に結ぶ事 右を向より掛けてくらせ
両わなを等〻〻〻能く引締て爰めてひざの
並を篤と正〻〻く直〻〻両わなの引の透かぬ
様ゆ引締め置き借一重結ひて両わなを両方へ
大指と中指とにて持両の人指にて中の結目を中へ押
寄るとき両わなを締るとき一度ゆ〻〻中の結目の
筋を能く通〻〻ぐんぐんやりと引ながら生る
様ゆ結び認る也又極秘一品あり 左の方へ
右先をとり〻〻向へひねり過て右の方へ横に
真碌ゆ筋を通〻〻て左右へ断まざる様に

見る事也此片わなの下端を向へ上端を前
へねぢる事極秘也右結ぶもの壁敷一置合す
片ハ右のわなを持る也 右の如く認る中け
肩衡ならハなんぞりと充壷ならハいんぞり
とわなを先〻て肩を持わせ認るなり ○又一品
の結方〻片わなをとり〻〻長く結び立て
と云真片方長き事一分と云古法也然れ共
目立ざる能真時迚も捻勝手は同心得也此時
長目〻する八必右の方能き也如此結置たる
を解合結ハ先ツ左の方にて必真茶入の肩

の所を脇と持て右の大指人指にて其右の方の長き輪紐先を摘て上へ結目を突上げ夫より如常解き捌くなり

茶入名器の部 左と

投頭巾　珠光所持

松本肩衝　投頭巾　（柴ノ誤カ）　（ナツ）楢紫　投頭巾の事茶道雑録に兵亂之頃矢ノ楢紫ハ御物松本肩衝も天下第一と称す中山もも投頭巾由昔

沙汰も古蓋なり　内張ハ細川三齋公細工なり　袋し三齋公所傳　龍仏殿子浅黄地鍍線花ゑ龍の三仏天下無類の切なり　替袋三ツ添　利休木綿（耶）（郭カ）織部梅鉢（陸子）遠州（丹）（ヒ）（ヒ）備前布袋　利休所持袋地紙屋宗貞なり　袋ハ袋ハ布袋と称す　筑前博多文林の茶入紙屋宗貞なり　筑前公、献す五百石を賜ふ

漢物茶の小松島と号す　付尼有徹と云

薬師院所持　信長公、献す

漢ノ茶入　口廣と号く左海漆路屋宗和秘蔵す名器也
利休時代同門の人
歌の中山の茶入　風早實種卿所持
脊高の茶入　山田宗無所持す
漢物茶入種種林　依久間宗透所持
同　茶入種好文　松永久秀弾正少弼所持
同　同　種圓壓茄子　同　所持
日野肩衝　日野輝資卿所蔵
小紫と種茶入　京灰屋三郎右衛門所蔵　佐世紹益ノ

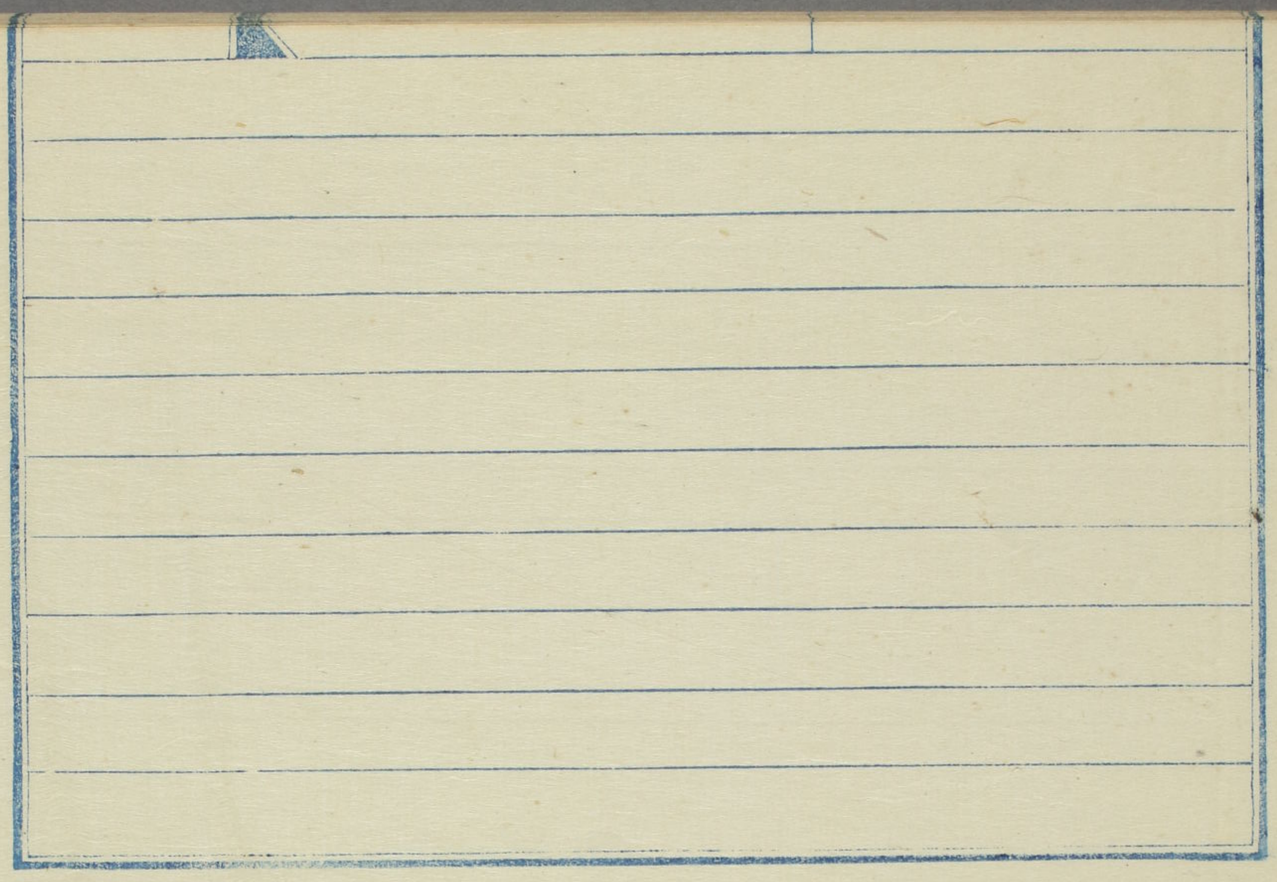
茶入床飾所望　點茶法法所望之客法也扁ニ曰
客ヽ主人ヘ茶入を床ゑ飾らんと望ミシ
時（名物唐物拜領物主人秘蔵の物等の時此事
ある也）主人ヽ却つて然らば御賢ゑ慮外
なれら御揚被下度ミと云事あり客辭退の
後強てとなれハ上客床前へ行き飾るべし（上
客相客へ讓り合ふ事ゑ論也又相客中ニ功者有
らば強て之を讓るもよし）○先ツ床前ゑ
坐し懐ヽり帛を取出し四ツ折ゑなし盆ニ
並べて敷両手ゑて茶入を取り帛の上に載せ夫

より盆を両手に取り床の左右と真中前後八向の地敷居と床がまちとの真中より畳目二ツ程向へ寄せ置き次に両手にて茶入を取り盆の上に載せ（帛にて茶入を拭ふも能し）帛を取りて懐中し本坐に復する也盆の前八畳の目數半目に成る様置く事習なり（但十七日十九日とも置事と云）

主人一礼し迎もの事にて御先へ拝見致度と云に恐客一礼して床前に行き荘を見て勝手に入る也其後客一人宛見て後荘たる客亦越て床前へ行き見るべし

主人揚る八軸脇也客の揚る八何時にても床の眞中也此所望八互に辭宜合と成り多分客揚る様に成り行ノ也故に上客八真心得して所望すべし中立後床に花入有時八所望無き事也又掛花入なり八床の上に明きてあるも花入の落る恐ある時八是亦所望せざるよし又床に花なる時棚有なれ八之に所望すべし也此所望八始め客より主人になす時却て主人より反對に客へ為す所望也

藪内紹智曰　盆點の時客より亭主へ返す時茶入
右手にて持盆左手にて持例の處へ置き亭主茶
道口明る客の挨拶御名器にし御坐候間あ
もへ御飾被下度猶綾々拜見仕度と云ふ時
亭主然らばあんへ御飾下さん度と挨拶
す客先きの如く持て立て床の上脇へ假置き
して花入下し亭主へ渡し床の中央江飾
るなり亦床の中央に盆石あるに飾りて
らば軸先軸脇へ成るも飾るべし但し花の
盆をたひ花をも盆にあげ亭主へ可渡

松屋筆記：
易云茶入盆に載せて見る事也盆にあらば
客より床へ所望して客茶入を床
へ上るハ如何にし眞にして亭主床へ
上るハ草にて つぶを物に障る樣に無之
べし
茶道全薄茶入：
ふくろきのそきの つ木 何にも妻ノ名あり
妻の上下面元たるを ふくろき
のそきハ竹の節のそ つ木ハ素也

茶入のあるを志ゐひんと云て口開きとなるゝ物
なりゝゝヲやゝ云ハ巻るゝ口開きたる物
なり又ふこ餅袋と云て武色なるふこ常ノ
ゝ餅袋ハ又ふこつゝと丸きなり
ひきめなりゝ